

ふるさとの山  
駒ヶ岳ものがたり

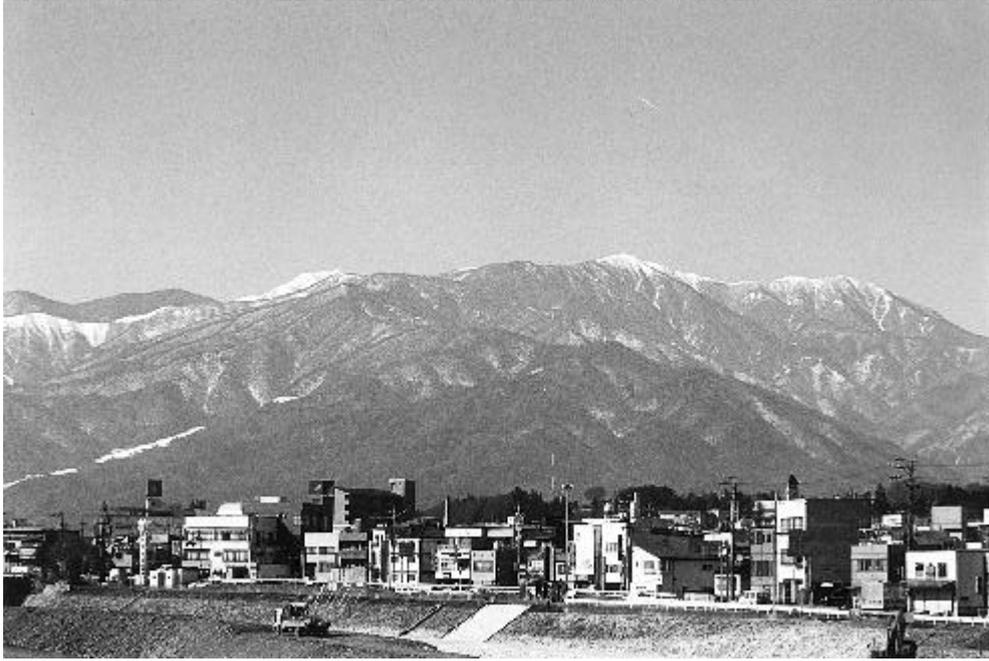
赤羽篤

# ふるさとの山 駒ヶ岳ものがたり

## 目次

	口絵写真	
	口絵地図	
	はじめに	9
第一章	記録に見える駒ヶ岳	11
一	駒ヶ岳の初見	11
二	絵地図に見える駒ヶ岳	13
	(1) 正保四年信濃国絵図	13
	(2) 信州伊奈郡之絵図	14
三	地誌に見える駒ヶ岳	14
(1)	駒ヶ岳の古歌	14
(2)	駒ヶ岳の山名	17
第二章	伝説の山駒ヶ岳	19
一	山麓の地名を巡って	19
(1)	駒ヶ原	19
(2)	御所や宮田	19
(3)	大田切	19
(4)	駒潰れ	20
(5)	市原・大田切郷	20
(6)	早太郎	21
(7)	雪形のいろいろ	22
二	馬の住む駒ヶ岳	23
(1)	三季物語	23
(2)	雲間に消えた駒	25
第三章	開け行く駒ヶ岳	26
一	高くて遠い山	26
二	山の夜明け	28

第四章	高遠藩の駒ヶ岳見分	29
一	安藤太郎兵衛の駒ヶ岳一覽	30
二	阪本運四郎の駒嶽見分	34
三	阪本天山の『登駒嶽記』	35
第五章	山麓の猛者	38
一	イノシシ騒動	38
二	イノシシの本場	40
(1)	イノシシの遺跡や地名	40
(2)	猪鹿発向	42
三	猪肉調達の廻状	43
第六章	コマクサの今昔	44
一	コマクサの群落	44
二	駒ヶ岳における植物調査	46
三	コマクサの古典を追って	47
(1)	西駒ヶ岳の植物誌	47
(2)	矢田部の標本を観る	49
(3)	『木曾薬譜』を追って	49
(4)	再び『木曾薬譜』を追って	52
(5)	再び駒ヶ岳の植物調査誌に	52
おわりに		55
駒ヶ岳年表		58



伊那市中央区より望む駒ヶ岳



赤穂中割より望む駒ヶ岳



飯島町岩間より望む駒ヶ岳



高遠城跡殿坂より望む駒ヶ岳

東



北

南

西

「正保四年信濃国絵図」の駒嶽の東西の部分

東

北

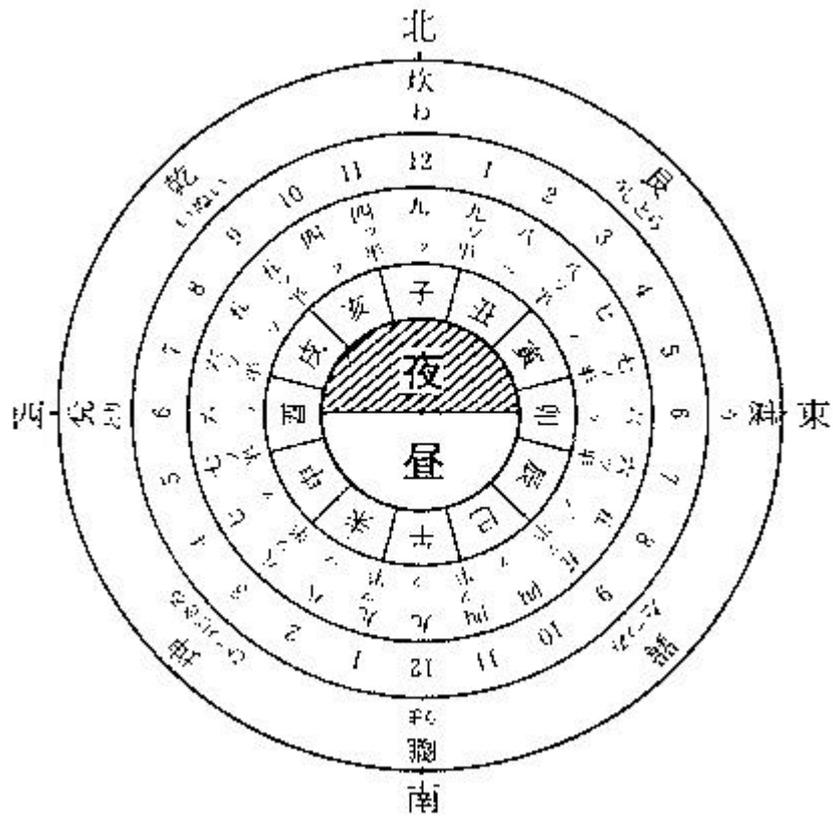
南



西

「信州伊奈郡之絵図」の駒嶽の東西の部分

## 方位・時刻表



\* 1 ~ 12のアラビア数字は現在の時刻。

## はじめに

佐久郡臼田郷（現臼田町）の神職井出道貞は、信濃国内の奇勝地を隈なく調査研究して天保五年（一八三四）に『信濃奇区一覽』を脱稿した。これはその後明治十九年（一八八六）になって、その孫によつて『信濃奇勝録』として出版された。この第四巻伊那郡之部に「駒岳こまがたけ」が一項目取り上げられ「駒か岳八木曾と伊那の間に秀十余里れんに連亘つらなして實に屏風を立てるが如し俗に三十六峯八千谿たにと云」（下略）と記している。

この木曾と伊那との間に屏風を立てたような山並みとは、明治二十二年（一八八九）に原田豊吉によつて命名された木曾山脈のことであり、次いで英人ウエストンによつて日本の山脈にアルプスの名称がつけられると、木曾山脈は三つのアルプスの真ん中にあたることから中央アルプスとも言われるようになった。

木曾山脈は、北は塩尻市南部に始まる経ヶ岳山塊から権兵衛峠の鞍部を経て山脈の中央部をなす駒ヶ岳山塊となり、さらに南西に延びて岐阜県境の恵那山（二一九一m）

に至る高峻な山脈で、昔から三十六峯と言われるように、現に二千メートル級の高い峯が四、五十も相互に連なり、そこからは数多くの谷が険しく刻まれ、特に伊那側では大小の河川が田切地形を造っている。

上伊那地方で、ふるさとの山として昔から親しまれてきた駒ヶ岳（二九五六・三m）は、この険しい山脈の主峰であるが、主峰といつても駒ヶ岳は独立峰ではなく、本岳の駒ヶ岳を中心に北は将棊頭山（二七三〇m）、南は中岳、宝剣岳（二九三一m）、それに東西二つの前岳（二九一一m）（二八二六m）などを一括した山塊の総称とされている。

そればかりでなく井出道貞より先に同じ佐久郡の岩村田宿（現佐久市）の歴史地理学者吉沢好謙は、明和四年（一七六七）に『信濃地名考』を著し、「駒ヶ岳八福嶋のうへにあり、木曾と伊奈にまたがる跨、南北凡六十里、山脈上伊奈宮処ノ牧にいたる、」と記し、この山脈全体を大きく駒ヶ岳と見なしているのである。また中村元恒や堀内元鎧の『信濃奇談』（一八二九）の駒嶽の項には、頭注に「風越の峰も飯田より宮所の一山の総称なるべし。今の白山の峰のみ風越とこころえたるは誤りなり云々」と書いている。

また明治十六年（一八八三）に本郷村（現飯島町）の千

村与造が編集した上伊那郡図を見ると、本岳から宝剣岳、空木岳を経て駒ケ岳（現南駒ケ岳）方面までを「此峯ヲ総称シテ駒ケ岳ト云フ」と注記している。現に飯島の村人は、空木岳や南駒ケ岳など奥山を総称して駒ケ岳と呼び、駒ケ岳下の広い山地を西山と呼んでいるようである。

昔は峯々の命名もまだ少なく、木曾山脈全体を駒ケ岳と称していたような時代もあったことが推察できよう。

しかし今では一般に本岳を中心にした山塊を木曾駒ケ岳と呼び、国土地理院発行の地形図（二万五千分の一）の図名にも「木曾駒ケ岳」となっている。

でも昔は、木曾でも伊那でもこの山を呼ぶには駒ケ岳がごく自然であつたし、駒ケ岳と言えば信濃のこの駒ケ岳と自負して止まないところであつた。

ところが今では駒ケ岳という名前の山が全国各地に多くなり、その数は二十以上にも及ぶそうだから明治、大正、昭和の過程で木曾名勝や信濃名勝の一つとして駒ケ岳の宣伝が大いに効いたためかもしれない。

でも昔は木曾でも伊那でもわざわざ木曾駒ケ岳とは呼ばなかつたであろう。それが伊那では東方赤石山脈（南アルプス）北端の駒ケ岳（二九六七m）を甲斐駒ケ岳とか東駒ケ岳と呼ぶようになったので、それに対して西駒ケ岳と呼

ぶようになり、さらに東駒とか、西駒と略称するようになった。最近は新聞などでは中ア駒ケ岳などとも書くようになった。略称西駒も便利だが、少しでも改まれば伊那地方の人々ならばやはり駒ケ岳と呼ぶであろう。

そうした名前の謂れや呼び方をはじめ、人々と山との長いかかりによってふるさとの山となった駒ケ岳の由緒を広く尋ねてみたい。

## 第一章 記録に見える駒ヶ岳

### 一 駒ヶ岳の初見

文献の上で駒ヶ岳の山名が最も早く見えるのは、鎌倉時代の「工藤文書」(『信濃史料』第四巻)であろう。

駒ヶ岳と直接何かの関係があった訳ではなからうが、鎌倉時代にこの駒ヶ岳の東側の天竜川沿岸の所々が「伊那春近領」と呼ばれる特別の所領となっていた。そういえば直ぐに伊那市の春近という地名に気づくことであろう。

この春近領というのは中世の信濃各地に散在していた公領で、その性格についてはなかなか難しい。伊那春近領に所属した郷としては、おおよそではあるが、北から小出二吉郷(現伊那市東、西春近)・赤須郷(現駒ヶ根市)・飯島郷(現飯島町)・片切郷(現中川村)・田島郷(現中川村)・名子郷(現下伊那松川町)などが挙げられている。

伊那春近領の一番北に当たる小出二吉郷は、鎌倉の北条氏の家臣の工藤氏がこの地に土着して小出氏を名乗り、地頭に補任されていた。有名な犬房丸の伝説は、この工藤

氏にまつわるものと言われている。そしてまた、この工藤文書のことを地元の伊那では「小出文書」とも呼んでいる。

建長三年(一二五一)という鎌倉時代の中頃で、今から七百五十年も昔のことになるが、小出能綱が所領の一部を子息の宮熊に譲り、その譲状が小出文書の中に残っている。その証文には、その土地の東西南北の境(四至)が書かれているのでその一部を次に書き出して見よう。

(前略) 譲わたす至四さかいの事、

きたは限、おくる川のもと、まかりおのさき、おきそ、こいろ、こまかたけのととまで、このなかれを大道も大道をみなみさまに、新大夫か在家のみなみのみちのつしまて、

にしはかきり、こまかたけのととまで、そのみねをくだりに、くわうのいたのひかしむきのお、大とさわのふかさきりつく(下略) (次頁写真参照)

「こまかたけのととまで」が二回も使われている。これは駒ヶ岳のとどのつまりまでという意であろう。大変分かりにくい文章ではあるが、北は小黒川が境で、川口から、曲がり尾の崎、小木曾、こいろを通過って駒ヶ岳のとどのつ

まり迄という意であらう。

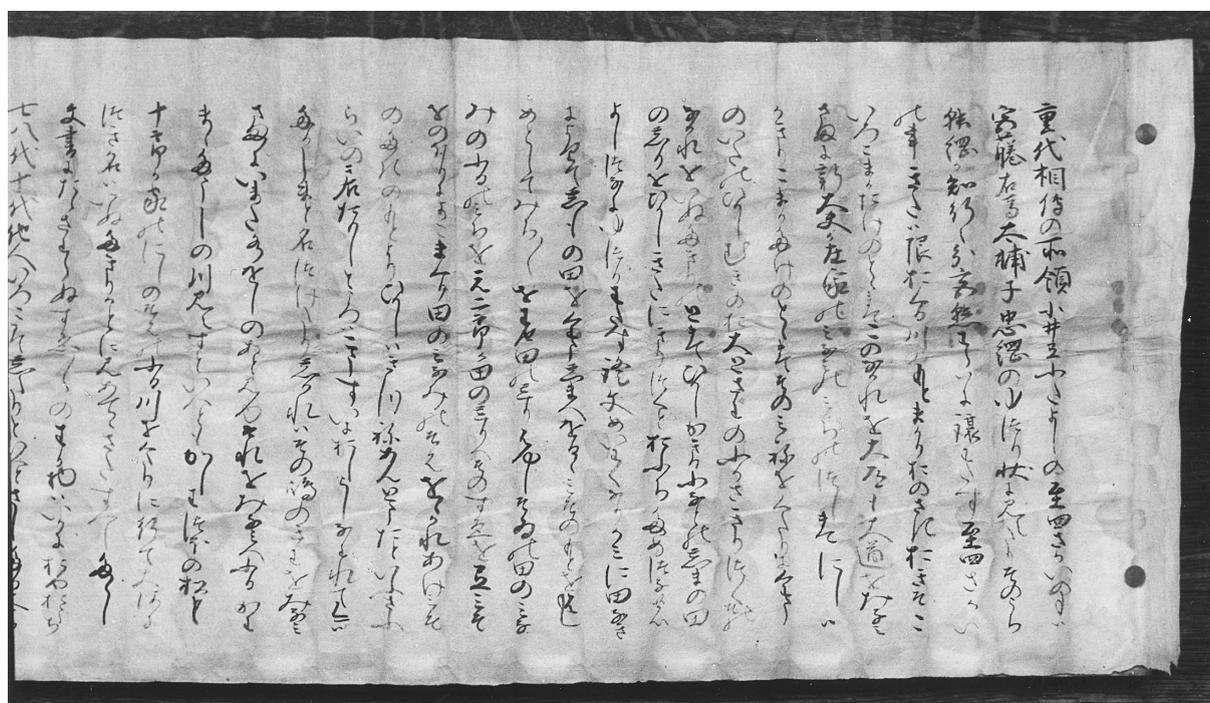
小黒川の現地の様子から実際に駒ヶ岳の本岳は見えなくても小黒川の源流地を「こまかたけのと」といつているのであつて、駒ヶ岳とはここでは将碁頭山を指しているものと思われる。

また西の境は「こまかたけのと」まで「その峰」から下つて「くわうのいたの東向きの尾」を「大戸沢」の深さきりつく云々というわけで、よく分からないがその峰といふのはやはり将碁頭山をいつているのであらう。

語意や文意が十分に読み取れない所もあるが、所領の北と西の境界線を示すのに「こまかたけのと」が終点あるいは起点として二回使われている。

駒ヶ岳の山容は独立峰ではないが、その山塊の一部の將碁頭山がすなわち駒ヶ岳として小黒川の源流地とされたいことがよく伺われる。

この地方の西方に聳える高くて大きな山だけに、昔はこの山が土地の境の目印の一つとされて地元の人々の生活の中に溶け込んで居たことがよく分かるであらう。



小出能綱の譲状 — 建長三年(1251)

諏訪市 矢島幾氏所蔵

## 二 絵地図に見える駒ヶ岳

鎌倉時代の「小出文書」に「こまかたけ」の名前が出ているならば、一体この山の名はいつ頃から呼ばれて来たのだろうかと、疑問は古代へ溯るのだが、それどころではない。鎌倉時代以後南北朝から室町、戦国時代へと下つてもこの間、残念ながら駒ヶ岳に関する記録は全く見ることができないのである。

しかし江戸時代になると、幕府は国々に国絵図を作らせたのでそのため運よく残った信濃の国や伊那郡の絵地図で駒ヶ岳を見ることが出来る。

### (1) 正保四年信濃国絵図（口絵地図参照）

江戸時代になって正保元年（一六四四）に幕府は諸国に郷村帳・国絵図および城絵図などの作成とその提出を命じた。これによつて信濃国では松代藩主真田信之をはじめ飯山・上田・飯田・松本の藩主等が郡を分担して調整し、松代藩でまとめ上げて幕府に提出した。こうして出来た国絵図がいわゆる「正保の信濃国絵図」で、その複本（上田市立博物館所蔵）が今日、信濃最古の国絵図とされている。

この信濃国絵図（『長野県史近世史料編第九巻全県付録』加工複製図）で南信濃の部分を見ると、西は木曾、東は伊那と郡の境界線が太く南北に引かれ、山形に湾曲したその西側に大きく西向きに「駒ヶ岳」と記入されている。

そして下方山麓には福島村の「御関所」の記入があり、街道が南北に村々や馬次を結んでいる。この街道は中山道であるが名前は何処にも書かれていない。そして伊那側に比べて木曾側の山肌が細かに書かれていて『信濃地名考』の「駒ヶ嶽八福嶋のうへにあり、木曾と伊奈に跨またがる、南北凡六十里」という書き振りが如何にも思われる。

これに対して天流川（マユ）の東岸の村々と甲斐や駿河の国との境をなす赤石山脈は、なだらかな山並みに略筆されていて山名は一つも書かれていない。実際には村里から奥深い高山であつて谷間の村からは山の姿も見えず、山の名さえ呼ばれないくらい村人にとつてもあまり用のない山地であつたからかとも思われる。

こう見てくるとこの絵地図から、東西両山脈と地元の人々とのかわりというものには、当時大きな違いがあつたものと思われる。

(2) 信州伊奈郡之絵図（口絵地図参照）

この絵図は旧播州龍野藩主脇坂家（現兵庫県龍野市）に所蔵されていたもので現在は飯田市立図書館に保管されている。一般には「脇坂絵図」と呼ばれ、伊那地方の最古の絵図として歴史研究に大いに利用されている。

脇坂氏は正保の信濃国絵図や郷村帳作成の調整役に選ばれた飯田藩主脇坂安元である。安元は元和三年（一六一七）に伊豫大洲（現愛媛県大洲市）から飯田に移り、絵図作成の時には藩政も既に二十数年に及び五万五千石の封地は、下伊那から上伊那の片桐郷や赤須、さらには箕輪郷一万石にも及んでいた。

伊奈郡之絵図の作成は自分の分担で、その上信濃国絵図作成の調整役の一人だったから伊奈郡之絵図は模範的な作品であったと思われる。その複本が首尾よく脇坂家に残っていたわけであろう。

この絵図は天竜川を中心にして伊那谷を東と西に眺めて書いたもので、国絵図よりは遙かに細かく出来ている。

西方木曾境には上穂山から北は後の権兵衛峠の鞍部まで「駒嶽」の文字が三つ、南は飯島山の背後に二つ、合わせて五つの峰に「駒嶽」の文字が記入されている。

この書き方は前にも触れたように駒ヶ岳は独立峰ではな

く、古くから山塊の総称であったことを如実に物語っているし、何時誰が言い始めたか分からないが『信濃奇勝録』にいう三十六峯、八千谿の謂れもこの図によって何うことができる。

またこの伊奈郡之絵図では東方甲斐との国境に国絵図には見えなかった「駒嶽」がただ一つ鹿塩山の東に記入されている。これはいわゆる甲斐駒ヶ岳で独立峰である。

こうした東西の駒ヶ岳の記入の仕方の違いを見ると、甲斐の駒ヶ岳が一山単独であるのに対して、伊那谷の西方木曾谷との間に跨がる駒ヶ岳は、やはり山塊の総称というように読み取れる。また伊奈郡之絵図に甲斐の駒ヶ岳が記入されているのは、高遠や入野谷にとってはかかわりがある山だったからであろう。

### 三 地誌に見える駒ヶ岳

#### (1) 駒ヶ岳の古歌

「信州伊奈郡之絵図」の作成以後、駒ヶ岳について何か記録されたものはないか、と探してみてもなかなか見当たらない。でも伊那地方には、信濃の他地方に比べると成立時代の早い地誌として、関盛胤と宮崎言周の二人の著作を



殿村八幡の森より望む駒ヶ岳（南箕輪村南殿）

取り挙げる事ができる。では彼らは駒ヶ岳についてどんなことを書いているか調べてみよう。

まず箕輪郷木下の関盛胤は、元文五年（一七四〇）に『伊那温知集』を著し、信濃国名所記に駒ヶ岳について

春近庄上穂村之西山なり。古来の歌なし。寛永の頃飯田之城主脇坂淡路守安元、箕輪の陣屋に止宿有て殿村の八幡之森へ狩に出られ駒ヶ岳を望みみて詠せらる。

尾も白しかしらも白し駒ヶ岳かんのつよさにゆきのはやさよ  
藤原安元

と記している。

次いで片桐郷の宮崎言周は、元文六年（一七四一）に『信州伊奈郡郷村鑑』を著し、上穂の項で

駒ヶ嶽ノ頂上八四時雪降、伊那一番ノ寒地也、古歌有、  
いなくく八月毛と見ゆる駒がだけ雪にいさむか春近のさと  
と

と誰の歌かは分からないが、駒ヶ岳を詠んだ古歌一首を挙げています。

前者は古来の歌なしと言い、後者は古歌ありと言い、両者互いに相反しているが、どちらもかるうじて一首を挙げているに過ぎない。

木曾谷と伊那谷に跨がる大きな山並みで、鎌倉時代に山の名も見える由緒をもちながら、そう言われてみれば確かに「古来の歌なし」である。これは一体何故かといえ、伊那一番の寒地で歌枕として名所になれなかつたためかも知れない。

その後安永八年（一七七九）に高遠藩老將上源五兵衛は、領内の見聞を地誌に編集して『木の下蔭』を著しているが、このことをとり挙げて

駒ヶ岳は名高き山なれども、土地の辺鄙なる故にや、古しへより歌にも詠まれず、名所と言はれざること惜しむに絶えたり云々と残念がつている。

古来東山道は駒ヶ岳の東山麓、つまり天竜川西岸を南北に通じていたのだが、大小の田切を何処で渡ろうが、峠とぼたつ西山の眺めは道行く人の目を楽しませるところではなかつた。近くは天明三年（一七八三）に伊那谷を初めて北へと旅した三河の文人菅江真澄の目にさえ駒ヶ岳は止まらなかつたのか、『伊那の中路』には駒ヶ岳の記事は見えない。そして翌年の『すわの海』には、三月二十七日、卯ノ木村（現箕輪町）にて「駒ヶ嶽いとよく見えたり、此山は春近ノ庄上穂村の西なり、まさしき名所にはあらず」と例

の脇坂安元の歌を挙げているのみである。

こう見てくると、山の景色はむしろ天竜川の向こう遙か東方に聳える南アルプス連峰へ目を奪われたのではなからうか。高遠町の鉾持神社の神木の下に古い歌碑がある。

信濃なるいなにはあらずかひがねにふりつむ雪のとくる

程迄 源重之朝臣

作者源重之（一〇〇〇）は、平安時代の歌人で三十六歌仙の一人であり、この歌は家集『重之集』に所収されている一首である。この歌碑が鉾持神社に立てられている由緒についてはつまびらかでないが、重之は陸奥をはじめ諸国を旅し、東山道を行き来した人というから恐らく伊那の道筋での詠と思われる。

しかし、それにしても信濃なる伊那にはあらず甲斐が峰であり、それもただの一首であったことは、やはり惜しいことであつた。

さて、先の二つの地誌にとり挙げられた古歌二首は、何れも寒さに負けずに意気盛んな駒ヶ岳の駒をその山容になぞらえて巧みに詠んでいて、駒のいなく駒ヶ岳のイメージが強く感じられる。そして古歌の有無もさることながら、現に駒ヶ岳の駒のいななきが聞こえて来るかのようにさえ感じられる。

## (2) 駒ヶ岳の山名

前掲の駒ヶ岳の二つの古歌では、山名は形が駒に似ている所から呼ばれたものとして、それが分かる。そうすると、それは何処から眺めたら駒によく似て見えるのか、こうした山名の由来についてはなかなか分からない。

しかし、後の資料ではあるが、阪本天山は『登駒嶽記』(一七八四)でこのことに触れている。しかし大変難しい漢文であるので、小松徹通訳(『伊那路』第十六卷第三号)により次に掲げる。

此の山を駒ヶ岳と呼ぶのはその形が似ているからである。現在信州の風土記は残って居らず、古書に稀に信州の名が出て来ても、参考にする程の詳しいことは書いていないが凡て信州に関する文献は不足して居り、従つて昔の此の山の状況は不明である。今高遠城から望見すると、天辺には切り立った数個の峰、中程にはほら貝のような峰が雪を帯び、全体として駆ける馬のような形をしている。此の形は四・五月頃にとりわけ鮮明で、両方の耳、片方の眼、右側の口元、前の足、たてがみや尾などもはつきり指摘される。

大変具体的であるが、他所にもこれに似たような眺めの出来る所があるだろうか。

駒ヶ岳は高峻な連峰であるので、近くからは目の前に手に取るように、また遠くからは躍動的に大きく見えて四季折々に地域の人々に親しまれて来た山であった。

また、それでいて誰も簡単には登ることのできない遠い山であり、それだけに神秘的な山でもあった。

朝夕の気象の急変をはじめ、異様な山肌の四季折々の変化は、時には怪しき山でもあった。

特に春から初夏にかけて雪の消え具合によつて山肌と残雪の白黒とが描き出す大小さまざまな模様の中には、生きた馬のように見えるものもあつた。人々はそれを駒形と呼び、駒形の現れるその山を駒ヶ岳と呼ぶようになった。

この駒形に関する見聞が『木の下蔭』には、次のように種々記載されている。

一、絶頂より北へ下る。駒の形遠方よりありありと見ゆ。春秋雪のむら消又雪のうすき頃猶一体まして見ゆるなり。木曾路より見れば此駒登る形に見ゆるとぞ。

一、此本岳の峰より駒形の見ゆる山は東北に当り三、四丁あり。おなじ並に天狗岩といふあり。

一、駒形の山の峰に駒の足跡とて岩にくぼみたる爪形二つ並びて水たまりあり。又馬船岩とて広くくぼみて

水溜まりたり。

この駒形の見聞についてはそれまでに高遠藩が行った駒ケ岳見聞の成果の数々が含まれていると思われるが、そうした明和の時代に、前にも述べた佐久の吉沢好謙は、『延喜式』『吾妻鏡』『続日本紀』（しよくにほんぎ）などの古文獻を引用して『信濃地名考』で駒ケ岳の山名の起源について説明している。原文はなかなか難しいので口語訳すれば次のようである。

この駒ケ岳は上伊那の宮所までも続いている。宮所はその昔左馬寮の牧であった。後に『吾妻鏡』に出てくる小野牧は宮所牧の北にある。宮所の奥の今村には駒飼山（こまかいざん）と言ふ山号の寺もあり、昔からこの辺は名馬の産地として有名である。

『続日本紀』には、天平十年（七三八）正月に信乃国から朝廷へ神馬の献上があり、その馬は毛並みは黒く鬣（たれがみ）や尾は真つ白であったと書いてある。駒ケ岳という山の名はこの神馬にちなんでつけられたのであろう。

また元和年中に飯田城主脇坂侯の作として知られている例の「尾も白し」の歌も全くこの『続日本紀』に出ている神馬のことを歌っているのである。その頃までもなお尾鬣（びほ）白き馬の様子をめたくうたっているものと思われる。

というのであろう。

当時神馬は、大宝二年（七〇二）に飛騨国より献じられたのを初めとし、天平三年（七三一）には甲斐国より、次いで同十年に信濃国より、下って神護景雲二年（七六八）には肥後国より共に神馬として献上されているという。神馬の献上は、大赦大瑞などの際で何れも黒身白鬣尾の駿馬であったので黒身白鬣尾の馬は余程貴重だったようである。駒ケ岳が木曾山脈全体に係る山名とすれば、その伊那側の山麓一帯は、『延喜式』に見える宮処・平出・笠原の牧や更に小野や辰野の牧などがあつて古来名馬の産地であった、そこから神馬が献上されたことによつて駒ケ岳の山名が生まれたと解釈すると、『信濃地名考』の説もあながち附会の説とはいえないであろう。

## 第二章 伝説の山駒ヶ岳

### 一 山麓の地名を巡って

#### (1) 駒ヶ原

日本武尊が東国を征伐して都への帰途、甲斐を経て信濃から山坂を越えて美濃から尾張に出た事は『古事記』や『日本書紀』に見え、現に日本武尊に関する伝説は信濃各地に分布しているが、中でも大田切川をはさんで宮田や赤穂には神話や伝説が少なくない。その中から馬に関するものを挙げてみよう。

尊が東国からの帰途、大田切川まで来ると大水で渡ることが出来なかつた。すると西山から頭と尾の白い一頭の馬が駆けてきた。尊は不思議に思つて里の翁に聞くと、それは西山に住む神馬で秋冬は駒ヶ原に住み、春夏は西山に住む旨を申し上げた。尊はその馬に乗つて無事に大田切川を渡られた。また駒ヶ原の御座石は、尊がその時に腰掛けられた石といわれている。

#### (2) 御所や宮田

黒川の上流に北御所という所がある。ここに光仁天皇（在位七七〇～七八一）の第三皇子が隠れておられた。

宮田は皇子の料田であつた。この地は秋には雪が早く降り、春には雪の消えるのが遅くて五穀が余り実らなかつたので皇子はそれを悲しみ、

四方の山すぐれて雪は早けれど春近ければ雪消えにけりと詠まれた。すると、梅の局も、

駒ヶ岳尾根尾根雪は積もれども春近ければ雪消えにけりと詠んだ。その後五穀の実りが豊かになつたという。

北御所・中御所・宮田・上の宮・下の宮・春近などの地名はみなこれらに関係した地名であるという。

#### (3) 大田切

諏訪神社の縁起として名高い『諏訪大明神畫詞』に書かれている話である。

延暦二十年（八〇一）、桓武天皇の勅命で坂上田村麿が安倍高丸の反乱を平定のため奥州に下向した。たまたま伊那郡と諏訪郡との境の大田切川まで来ると、梶の葉の紋様の水干を着て鷹の羽の矢を負い、葦毛の馬に乗つた武士が待ち受けていた。誰かときくと当国の住人だがどうか蝦夷えぞ

征伐に連れて行ってくれと言うので、これは只人ではないと思つて奥州への先陣をさせたところ、所々において兵を集めてはその勢いによつて行く先々で田村麿は蝦夷征伐をすることが出来た。この武士こそ関東第一の軍神諏訪大明神の化身で、戦勝はその神徳によるものであったという。

#### (4) 駒潰れこまつぶれ

宮田村上の宮の林の中の道端に駒の蹄の跡と言われる窪みのある石がある。駒が東の駒ヶ岳から西の駒ヶ岳に跳んだ折り、跳びきれなくなつて此処で潰れてしまつたというし、また木曾義仲が木曾から駒ヶ岳の神馬の案内で勢いよく伊那へ攻め込んできたが、余り険しい山坂であつたので上の宮までくると駒はついに疲れて潰れてしまつたとも言われている。駒が東の駒ヶ岳から跳んだという伝説の石は下伊那の松川町にもあるし、駒の蹄に似た足跡のある自然石は各地にあつていろいろな伝説を生んでいる。

駒潰れという珍しい地名について考えると、『諏訪大明神畫詞』の中の次のような話も考えさせられる。

大祝おほはひりの為仲は八幡太郎義家の招きにより上洛しようとした。大祝は諏訪郡内から出ないことになつていたので、父為信は大祝為仲の上洛を止めさせようとしたが、それを振

り切つて上洛の途についた。上社一の鳥居の前から出かけていくと飾り馬まで病み伏し、大田切に至るまでに七足も馬が死んでしまつた。これは父や一族の諫言かんげんを聞かずに出陣したからであるとの話によつて、大田切の近くに駒潰れの地名が生じたのではないかというのである。

あるいはまた東山道が宮田を通つていたので馱馬かまや伝馬、あるいは牧から朝廷へ貢進する貢馬くめがたまたま旅の疲れで死ぬこともあり、そんな事から生まれた地名かともいわれている。

#### (5) 市原・大田切郷

二つとも『吾妻鏡』に見える地名である。

治承四年（一一八〇）平氏追討の戦が始まると、信濃では頼朝の命令によつて木曾義仲が信濃の平氏の討伐を命ぜられた。義仲は九月七日、大軍を率いて市原に平氏の笠原頼直を破り、頼直は越後へ敗走した。

星野荷山は『高遠記集成』（一一八〇〇）にこの時義仲の軍は木曾から駒ヶ岳を越えて伊那へやって来たとき次のように書いている。

義仲（中略）急キ打立殿原トテ樵夫ヲ捕ヘテ案内サセ駒岳ヲ南へ廻り道モナキ巖石ヲ躰たもとヲ力ニ取ツキ險阻ヲ

凌キ辛フシテ伊那郡ニ打テ入（今此道ヲ木曾殿越ト云至テ險阻ナリ）

星野葛山の頃、木曾殿越の地名があつたわけで、今でも空木岳（二八六四m）北方の鞍部を木曾殿越（二六〇〇m）と呼んでいる。また一説に市原は余地原ではないかなどといわれたが、今ではこの市原の戦は善光寺平と比定されている。

また『吾妻鏡』には引き続き九月十日、頼朝の命を受けた甲斐の武田氏等は、伊那郡大田切郷の城に威を振るつて居た平氏の方人の菅冠者を戦わずして滅ぼし、根上河原で戦後の事を話し合つたと記されている。

大田切郷の城とはこの時初めて出てくる地名であるが、恐らく大田切川流域にあつた城をいうのであろう。

大田切川は駒ヶ岳から流れ出る荒川でいわゆる田切地形の典型をなし、古くからの歴史地名となつている。（大田切や大田切川の大は、古くはいずれも大であつた。しかし、今は地名は大であるが、河川名には大や太が混用されている。）

## (6) 早太郎

昔、駒ヶ岳に住んでいた山犬が光前寺の縁の下で子を生んだ。和尚さんが親切にしてくれたので山へ帰るときその一匹を寺へ預けていった。寺では早太郎という名をつけて大事に育てた。

その頃遠州府中の天神社の祭りの前になると、年頃の娘のいる家の屋根に白羽の矢が立った。そうすると、娘は夜更けに人身御供として神に召されて再び帰ることがなかった。

ある年、不思議に思つた旅の僧がひそかに伺つていたら狒々ひびが現れて「信州信濃のへエボ太郎に知られるな、スツテンテン」と歌いながら生け贄の娘をさらつていった。

そこで旅の僧が信州へ来て探すと、へエボ太郎とは光前寺に飼われている犬の早太郎のことだと分かつた。

次の年この犬を借りて行つて、生け贄の代わりに輿の中へ入れておいたところ、夜中に狒々が出てきた。いつものように歌いながら輿を開けようとしたら犬が飛びついてかみ殺してしまつた。

光前寺の和尚さんが、その晩は眠らずにお経を上げてみると、明け方になって早太郎が血だらけになつて戻つてきた。そうして和尚さんの顔を見るなり、倒れて息絶えて死

んでしまった。

かの村の人々は早太郎の霊を慰めるために、天神社一実坊弁在が筆写した大般若経六百巻を光前寺へ納めたといふ。

以上は、浅川欣一伝説集によったが、この早太郎伝説はあまりにも有名であり、部分的には伝えるところを異にしている。

光前寺には早太郎の墓があり、その縁起や般若経が伝えられている。またこの伝説がとりもつ縁で駒ヶ根市と静岡県磐田市との間に友好都市の締結が行われている。

#### (7) 雪形のいろいろ

伊那谷に春の訪れを告げる風物詩として駒ヶ岳の雪形がある。冬山の雪が解け始め、岩が頭を出したり地肌が出たりして、残雪が大小いろいろな絵柄を描き出すのは毎年のことだった。昔から人々は里からこの絵柄を眺めては、人や動植物など身近なものに見立ててきた。

これを駒の姿態に見立てたのが駒形で、これを駒ヶ岳の山名のいわれとする一説については既に述べたが、大自然の織り成す絵柄は駒だけではなかった。『木の下蔭』には、次のようにも書かれている。

一、駒形南の方、種蒔き爺という形見ゆ。五、六月の頃笠を冠り、柄杓を持ちたる形遠方より駒とひとしく見ゆ。此形あらわると大豆を蒔く時節と土俗云習う。

五、六月頃になると、駒形の南の方に笠をかぶり、柄杓を持って種蒔きをしているような人形が現れる。これが現れる頃は種蒔きの適期なので、これを種蒔き爺と呼んで大豆など種蒔きの時節の目安にしているというのである。

駒形は駒に限らず見る人により、また場所や時期により絵柄はさまざまで一般的には言いようも無く、何でも駒形と呼んで来たものと思われる。そして何時の頃か、これを雪形と言うようになったのであろう。

農業技術や気象観測の発達した現今では、駒形はとにかくとして、種蒔き爺や稗蒔き小僧は、微笑ましい昔話となったが、今なお各地に残る雪形を尋ねると、朝夕折々の駒ヶ岳を眺めて暮らした昔の人々の暮らしがしのばれる。

雪形のいろいろ（松村義也『山裾筆記』・その他）

伊那市西北部から

将棊頭山 種蒔き爺 姥 畑

左手 左八の字

南斜面 下り駒 上り駒 双馬

伊那市東部・高遠方面から

中岳 駒形

前岳 駒形 種時き爺(『木の下蔭』)

東斜面 駒形 種時き爺 下り駒(富県)

駒ヶ根市東部から

千豊敷 駒形

極楽平 稗時き爺

さぎだるの頭 島田娘 嫁様(中沢) 婿

(島田頭) 稗時き小僧

飯島町・中川村方面から

田切岳 種時き権兵衛 駒形

摺鉢窪 五人坊主

南駒ヶ岳 稗時き女 入子娘(市場割)

稗時きじよろし(北村)

越百山 牛天神

空木岳 うつぎの花

## 二 馬の住む駒ヶ岳

### (1) 三季物語

木曾地方の地誌で木曾を知るには最も適切な書とされている『吉蘇志略』<sup>きそしりやく</sup>という本がある。この書は尾張藩主の命を受けて藩士の松平秀雲(君山)が中国の明代の総合的な地理書として有名な『大明一統志』の体裁に倣って宝暦七年(一七五七)に大成したものである。

この書の第二卷上田の項を見ると、駒ヶ岳についての記事があり、『三季物語』の話が載っている。原文は漢文であるが、その部分を訓読して次に掲げる。

(駒嶽) 是木曾の東嶽なり、其の高さ数千仞にて数峰連続す、其の一つの峰は頂きに石有り、形馬の如し故に名づく。或は言う、此の山に神馬有り故に名づく。按ずるに三季物語に、織田右丞甲州を征伐し、軍を回すの日諸將に言つて曰く、吾聞く信州駒嶽に、四百年來神馬有り、明年は諸国の卒徒を督し、此の山を囲み、之を獵得せん、源右幕下の富士の狩に倣うべきなり。其年明智光秀の為に弑に遭い、其事遂に止む。

この『三季物語』とは江戸時代の何時頃、何処の誰が書いた書物が皆目分らないが、おもしろい話である。

信長は天正十年（一五八二）美濃岩村から伊那谷に入り、北進して三月に高遠城を落とす、さらに諏訪から甲州へ進み、武田氏を滅ぼし、其の足で東海道を上洛して六月二日に本能寺の変に遭っている。

話の真偽の程はとにかくとして駒ヶ岳の馬のことは、たまたま高遠城攻略で伊那谷通過の際にでも聞いたのであるうか。そして明年云々のことは甲州からの帰途上洛の道中での話になるうか。

「吾聞く信州駒ヶ岳に四百年來に及ぶ神馬ありと。明年駒ヶ岳を囲んで馬狩をしよう。」とは。

英雄のはかなき最後への賛辞と思えばそれまでであるが、また『三季物語』という書物への興味関心は尽きない。

この『三季物語』の信長の駒ヶ岳の馬狩りの話は、余程人々の関心を集めたと見えて後世の諸書に引用されているのに驚く。その原拠は『吉蘇志略』と思われるが、それだけでは済まされないのでは話は少し逸れるかと思うが、これに関して述べてみたい。

時代は文化年代後半の事になるが、箕輪の大出村で郷土

資料の収集編纂に当たった中村元恒はその名著『伊那志略』（一八一二）の駒嶽の項に早くも『三季物語』のこの話を紹介し、ついで『伊那古道記』『伊那記』『信濃奇談』などにも引用している。

元恒は二十三、四才の時に木曾の藪原にて医を開業していたこともあり、早くからこの『吉蘇志略』に親しんで来たものと思われる。

『伊那志略』は博覧強記ならではの元恒の大作であるが、書名はもとより編纂項目や順序などまで『吉蘇志略』に倣っていることは明瞭である。

また、伊那志略引証書目はさすがに元恒ならではの圧巻である。しかしそこには『吉蘇志略』は見えるが、『三季物語』は載っていない。それは元恒がこの本を見ることが出来なかつたから仕方なく『吉蘇志略』に拠らざるを得なかつた証拠であろう。

両志略とも『三季物語』の解題には触れてはおらず、この書について知る事の出来ないのは残念である。

ちなみに『国書総目録』（第三巻）によると、教育大（東京教育大学）・蓬左（名古屋市蓬左文庫）・鶴舞（名古屋市立鶴舞図書館）の三箇所は上下二巻の写本を蔵すとあるだけで、刊本は無く、解題も不明のようである。

(2) 雲間に消えた駒

さて『伊那志略』には『三季物語』に次いで「新著聞集に曰く寛永中、尾州有司、山上を巡覽するに神馬数尺なるを視る。」とある。

この『新著聞集』という本は、紀州藩士の神谷養勇軒という人が藩主の命令で日本各地に伝わる奇談や珍談を数多く集めて寛延二年（一七四九）に刊行したもので、この中に「信州駒が岳馬化して雲に入る」という題で次のような話が載っている。

寛文四年に、尾州より木曾路順見の事ありし。大目付佐藤半太夫、勘定方天野四郎兵衛、金役天野孫作、材木役都築弥兵衛、小目付真鍋茂太夫等なり。木曾案内とて、前の日に山村甚兵衛殿家来一人、所の百姓を召つれ、駒が岳の麓より、道筋をふみわけしに、峨々たる嶮巖、やうやくに蘿樹をよぢてのぼるべき、大なる葦毛馬の、首の毛も尾も地にたれひき、眼のひかりは鏡をかくるがごとく、其形相、見る人身の毛豎ておそろし。然るにかの馬、人影を見て、岑の中央までしづかに登りしが、劇に雲たち覆ひ、行方しれずなりし。その蹄のあとを見けるに、尺にあまりしと也。此山の東の方に、駒のかたちしたる大石あり。春に至て、雪のきゆる事、此石

よりはじまるとなり。

これは寛文四年（一六六四）の事、木曾の山村氏の家来が尾張藩の山検分の役人を案内して駒ヶ岳に登ったところ、大きな葦毛の馬がいて人影を見るやいなや峰の中空の雲間に消えてしまったという不思議な話である。

最後の「此山の東の方に、駒のかたちしたる大石あり云々」が話の落ちであるが、ここにも駒ヶ岳には馬に関してこのような神秘性がまつわっていたのかと考えさせられるのである。

神谷養勇軒は何時、何処でこの話を採集したかはつまびらかでないが、駒ヶ岳とはいうものの木曾側での話であり、それも八十年以上も昔の話で、こうした珍しい話は本の出来るずっと以前に木曾から峠を越えて伊那の方へも伝播してきて人々の駒ヶ岳への好奇心を駆り立てたことである。

## 第三章 開け行く駒ヶ岳

### 一 高くて遠い山

元文年間に時を同じく世に出た『伊那温知集』や『伊那郷村鑑』の地誌は、ともに駒ヶ岳の古歌の有無に触れていない。確かに駒ヶ岳の山麓の上伊那地方には古歌が少ない。

目の前に手に取るように見えている名山でも、詩歌の面では遥かに遠い山であったのだろう。それにたまたま、この地誌の著者の関盛胤や宮崎言周は、二人とも古歌の多い下伊那地方に縁の深い人であったからそれを痛感したのも無理のないことであつた。

しかし、二つの地誌に次いで世に出たのは『新著聞集』や『吉蘇志略』であつた。これには前述のように駒ヶ岳の駒の話が載っている。しかし、本が出たとしてもそれを読む人々はごく限られた少数の時代であり、むしろこうした話は本の世に出る前に地元の木曾地方へは広く知れ渡って身近な駒ヶ岳の奇談として人々の駒ヶ岳への関心を高めたものと思われる。

その話の源となつた駒ヶ岳の裏側の木曾山とは、木曾も南部の上松山・荻原山・伊奈川山など檜の美林で、早くから良材が伐り出されていたので、その頃は美林も大方は伐り尽くされていた。尾張藩ではその尽山対策を藩政改革の一大事業としていた時代であつた。

たまたま寛文四年（一六六四）には、多くの役人や人足が現地に派遣されて山々の林相・伐木・運材などの調査を進めていた。話はその見分最中の出来事であつた。

この山検分は福島に居館を構えていた代官山村氏が案内に当たっていたが、木曾におけるこうした山林政策の動きは伊那の方へも何らかの形で聞こえては来たことであろうが、一般的には山見分のことよりも雲間に消えた駒の話の方が余程ニュースバリユウがあり、やがて紀州藩の学者に採訪されるほどまでに広く流布されていたものと思われる。

駒ヶ岳連峰は、峰八分目くらいより上は草木もなく、山肌は焼け石のごとくさらされた急な斜面が多く、里からは高くて近く見える山ではあるが、誰でも容易く登ることの出来る山ではなかった。特に雪の冬山は見るからに厳しく、それだけに春から夏にかけての残雪の山は、里の人々にさまざまな思いをいざなう不思議な山でもあつた。

辰野町穴倉山( 1365.1 m )における  
駒ヶ嶽信仰 ( 昭和60年5月3日 )



しかし、そうした高くて遠い山へ近づこうとした先人の努力も早くから無かったわけではない。

寺伝ではあるが、慈覚大師による藤宝寺（羽広の仲仙寺）の開創（八一六）やその弟子の本聖上人の光前寺（赤穂）の開創（八六〇）などをはじめとして、山麓や山腹に寺平伝説を持つ真言や天台の古刹は少なくない。

また、馬の守護仏として仲仙寺羽広観音をはじめ、香住寺観音（今村）・龍ヶ崎観音（宮所）などがあり、守護神では古辺沢山神社（新町）や常円寺古辺沢稻荷社（伊那市）などがあげられ、今日なお馬の信仰の遺風が山麓各地に見られるのである。一般に古代の牧の実状についてはつまびらかでないが、以上のような信仰の遺跡や遺風は、宮所・平出・笠原・小野・辰野等諸牧の何かを伝える名残りの一部かと思われる。

また、役行者を開祖とする修験道の山岳信仰の伝承の遺跡や遺物も少なくないし、また早魃時の雨乞いと相俟って農耕の信仰として木曾でも伊那でも濃ヶ池から山頂への山道を開き、やがては駒ヶ岳神社を祀るに至ったものである。これら山岳信仰の伊那側の登山口としては、小出からの権現山コース、大田切川中御所コース、内ノ萱行者小屋コースなどが山の信仰と共に早くから開かれ始めた。

## 二 山の夜明け

伊奈郡之絵図で山々を見ると、山には芝(柴)山・雑木有・桧椈などと大まかではあるが林相の記入が見える。これは山々で早くも木材や草木の採取が行われていた証拠である。また絵図の西方伊那側に駒ヶ岳の山の絵が二つあり、それを背景にして上穂山の山形が「雑木有」として三つも書かれている。ここがいわゆる大田切り(山)であり、高遠藩初期の保科氏時代に宮田側と上穂側とで山争いが始まったが、保科氏の裁量により双方入会地と定められたまま元禄検地を迎えた。

しかし幕府による惣検地も例の高山険阻故御検地に及ばず、で奥山は前々どおりとし、ただ大田切川の谷口より下流の境界線に分杭を立てることで終始したようである。この結果がもととなり、やがて紛争が始まり、山を一時留山にまでして実地検分し、享保十二年(一七二七)によつて江戸にて幕府の裁許を得たようである。

耕地の拡大や山林資源の開発によつてこつした山争いは何処でも珍しいことではなく、それに伴つて検分や絵地図等の作成や利用は盛んになっていった。この大田切山紛争

は関係村はもとより、高遠藩当局も山検分の必要性を痛感したものと思われる。

これら入会紛争の山論文書を見ると、証拠資料として挙げられている事例などから、それまでに随分古くから杣人はもとより猟師あるいは行者等が入山していたことも分かる。

江戸幕府の五街道創設以来、中山道の開通により木曾谷の交通は今までの伊那谷の東山道に代わつて急速に開けた。初期中山道の牛首峠をはじめ、二つの谷を結ぶ交通路としては、先に清内路峠や大平峠があり、元禄九年(一六九六)には木曾側の伊那側への働きかけによつて権兵衛峠が開通し、萱ヶ平には木曾代官の管理する番所も置かれたという。

けれども尾張藩の寛文以来の林政は、宝永五年(一七〇八)には木曾山の檜・椈・椈・明檜・槇などの四木を停止木とし、全山で一切の伐木を厳禁するようになった。

こうなると木曾谷住民の山林利用は極度に狭められてその余波は伊那側へも無関係ではなかったと思われる。

さらに木曾側では、享保四年には奈良井から北川藤太夫等が駒ヶ岳の絵図作成のために登山しているし、同じくこの年には幕命の採薬御用により本草家野呂源次等が薬草採

集のため木曾大桑から駒ヶ岳に登山して薬草十余種を採集している。

さらに享保二十年には幕命により諸国産物書き上げが行われ、「享保年中谷中村々産物書上」と「高遠藩産物書上帳」が奇しくも今日残っている。

これは將軍吉宗が産業奨励のための基礎資料とするために命じたもので、動植物や鉱物などの調査も目立っていることから、領内村々ことの細かな取り調べが行われたものと思われる。

高遠藩としては既に享保八年に星野縫殿介ぬいどののすけによつて領分郷村絵図も作られており、今まで検地見分の行き届かなかった地域への調査がようやく行われようとしていた時と思われる。この次第はつまびらかではないが、安藤太郎兵衛による駒ヶ岳一覽は、高遠藩産物書上帳の提出された翌年に行われたのであった。

## 第四章 高遠藩の駒ヶ岳見分

前述のような情勢からか、高遠藩でも何時迄も高山険阻につき検地に及ばずではいられなくなったのであろう、元文元年（一七三六）には郡代安藤太郎兵衛が駒ヶ岳の見分けんぶんを命ぜられ、小出村の百姓人足多数を率いて初めて駒ヶ岳登山をするに至った。これは駒ヶ岳にとって画期的な事であり、この報告書である『駒ヶ岳一覽之記』は、見分の必要を一層喚起したものと思われる。

藩では二十年後の宝暦六年（一七五六）、山絵図作成のためにさらに郡代阪本英臣に登山を命じた。これによつて駒ヶ岳の絵地図が作成され、『駒嶽見分復命書』（『後駒ヶ岳一覽之記』）によつて詳細に報告された。

この両度の見分によつて駒ヶ岳は、古来の幻や伝説の山から大自然の高山としての実態が次第に実証見分されてきたのである。

そして更に二十八年後の天明四年（一七八四）には、郡代阪本天山が三度目の見分登山をなし、高山の真相を究め、庶民の信仰以上に更に精神性を高め、封域鎮護ふういきちんごの山と

成し、ろくめいせき勒銘石を残し、今日ふるさとの山となっているわけである。以下、それら見分の概要を見ることにする。

### 一 安藤太郎兵衛の駒ヶ岳一覽

(1) 日時 元文元年（一七三六）八月五日～十日

(2) 郡代 安藤太郎兵衛ほか徒者ともに二十一人

小出・殿島村両村人足 九十三人 計百十四人

(3) 登山コース

五日 高遠―小出村（現伊那市西春近）。

六日 出立のところ雨天のため小出村に逗留。

七日 権現山―東芦山に小屋がけして仮泊。

八日 まな板倉―這松、芝山の道―濃ヶ池上の峰

―本岳手前十余丁―絶頂―駒形山―濃ヶ池

崖下泊。

九日 北東の尾根道―芦山―権現山の峰―小出村。

十日 高遠帰着。

(4) 事前研究

高遠藩として初めての事であり、しかも目の前に何時も見てはいるが、未だ誰も登った事のない山だけに不安は多く、二十六年前の宝永七年に雨乞に、濃ヶ池

まで一泊登山したという小出村の百姓と、また同じ頃、黒川入りで樵をし、本岳まで登ったという宮田村の老人の話聞き、この老人も同行させている事など、慎重に事前研究がなされたことが伺える。

(5) 権現山を経て東芦山に雨中泊

権現山までは村人も登り馴れている。それから上は雑木林やすず竹の藪、風倒木を跨いだりくぐったり、道なき中を押し分けて行く。強雨になったため東芦山にて小屋がけする。立ち木を柱にして横木を渡し、役人の小屋は渋紙を二重にして天井を片下がり張ったが、たるみに雨が溜り、払ってもはらっても夜中雨漏りがしていた。人足たちの小屋は、葉の付いた木の枝で屋根を覆っていたが、結局この方は雨漏りしなかった。笹や枝の上に渋紙や薄縁を敷いて床とし、薪を山ほど集めて夜通し火を焚く。

この芦山まで来ても駒ヶ岳までは程遠く見えたので、最初尋ねた時は、日帰りで行けるといった案内の老人を呼び出して尋ねると、これより駒ヶ岳まで、まだ三、四里もあるつかという。話が違うではないかという、年寄りゆえ、話が前後してしまつたと笑っている。

(6) 本岳を前にして

八日朝出発。藪や林の中を行くこと二里ほどで、まな板倉という木が鬱蒼と茂った場所があり、さらに二里ほど行くと、かねて聞いていたように這松がまるで芝山のようになつたところに出た。この這松は長いものは二、三間もあり、透き間もなく谷の方へなびいている上を枝に取り付きながら行く事二里程で、松のない砂場のような平地に出た。だんだん登って峰に近付くと、西の方は木曾で、こちら側の下は濃ヶ池であつた。

濃ヶ池の東は御所山、南は駒形のある山、西も岳続きの山、北側へは大きな沢になっている。このように三方向から立て込んだ中に、南北二十間・幅十四、五間の濃ヶ池があり、西の方から見下ろせば、池まで二丁ほどであるうか。水の色は青々としているが、さらに濃い青色で幅七、八寸くらいのうねりが、池の真ん中通りを向こうからこちらの縁までうねっているのが見える。上から見れば小さな池に見えるが、近寄ってみると甚だ大きい池で、近寄り難くすさまじいものだという。池の水を汲んでくるよう二、三人の人足に申し付けたところ、山を走り下りて池に近付くのが見え

たが、寄り付き難く恐ろしい池に見えたという事で、やがて遙か下の谷の方から水を汲んで上がつて来た。この池は、長さ百間・幅六十間もあるといい伝えてくる由だが、いかにもそのように考えられる。

濃ヶ池よりまた二、三丁登れば、本岳は白雲を帯びて遙か南に荒々しく見え、それに劣らないような峰々が二段ほど見えている。濃ヶ池を丑寅（北東）の方角に見下ろし、西は木曾谷で、この谷を見下ろせばまるで屏風の上に登つたようで、道は一人一人がやっと立てるような岩である。

鳥も飛ばない程の数千丈とも見える西の谷は、白雲が大波のように翻り、さながら海上にあるようである。わずかに木曾福島辺りが透いて見える程度であるが、東はよく晴れて遠山辺りまでよく見えたが、富士山は雲の中で見えなかった。

さて、これから岳までの道のりは十余丁もあるうかと思われるが、険しい山容で、どこから取り付いたらよいものか、連れて来た杉人を呼び出して尋ねると、「どつやつてこの上まで登れましょつ。もうここも峰でございます。わしらも以前ここまで参り、向こうのお山を拝んで帰つたので、この先の様子は分かりませ

ん」という。

これを聞いて、一同の者は大変だからこのへんで下りようと口々にいい、岩に腰掛けて周囲を見回せば、足下は数千丈もあり、「目くらめき手の舞い足の踏むところを知らず」というのはこのことかと思いついた。

すでに陽は傾いて申の時を過ぎ（およそ午後三時頃）、たとえ絶頂まで行つたとしても、帰路はこの辺りで暮れるだろうから、濃ヶ池の上の難所もあり、灯火も持たずにこのような難所で夜になれば進退が窮つてしまう、ここまで来れば絶頂まで行つたも同然と衆議一決し、遠見の方角を記録した。

記録し終つて、さて下山という時になって、見物のため同道していた藩の重役の内藤庄左衛門が、「これまでにはるばる来たのも絶頂まで登るのが第一の目的で来たのに、九分目まで来て峰を目前にして引き返すなど実に残念に思う。岩壁で難儀をするなど、家を出る前からの覚悟だつたではないか。まだ七つ時（四時）過ぎだと思つから、急げば間に合う。仮令<sup>たとえ</sup>どの辺りで日暮になつてもいいから、どうしても高峰を見残すのは惜しい」といい出すと、安藤太郎兵衛をはじめ賛同

者が出て、それならば一刻も早く登るべしと、さつきまでの気持ちはどこへやら、皆々勇んで岩にとりつき松の根を攀じて岩を飛び移り、難なく絶頂へ登る。頂は鍋を伏せたような丸い山で、四方の山々を眺め、砂場や岩山付近の動植物を珍しく観察し、文字の消えた白木同然の分杭のあるのを幸いに、

元文元丙辰年八月八日

御名代 内藤庄左衛門 安藤太郎兵衛 同金左衛門

岩瀬丈右衛門 中村甚右衛門 徒者共に二十一人

小出・殿島両村百姓之人足九十三人 都合百十四人

登

と登頂記念の署名をする。

絶頂近辺の見届けをして夕日と共に下山。予め人足たちに小屋がけを命じてあつた濃ヶ池の崖下に泊まる。

(7) 濃ヶ池より下山

九日東天、四方の遠山、富士嶺は駒ヶ岳の八分目程、日輪の大きき六、七寸位、元の道を下る、九時頃芦山、昼飯、七ツ半頃権現山、両村役人出迎え無事を祝い一献、入相<sup>いりあひ</sup>時に無事小出着、泊まる。十日九ツ半出立、七ツ半高遠安着。

(8) 見分観察事項

濃ヶ池は三つ、一つは本岳の北方東下、一つは本岳の後七分目（これは三つのうち最も大きく本濃ヶ池という由）、もう一つは空木岳の内にあり。此方の濃ヶ池は、本岳続きの岩窟見え、風強く、水色変化不定の様子、妖艶の気集まる所か、農人ばかりで来れば不思議、恐怖、疑惑の難もあるう。

絶頂遠見方角 二十余箇所

動植物その他 小松 九輪草の葉に似て実を結んだ草 黒色の百合 紅白の五月つつき かんぞうに似て実もある草 這松 峰の八、九分目より上は外の草木無く、焼け石のような石、御影石、岩茸、岩鳥、岩鹿、猿、生干しの馬糞、馬の尾の毛。

馬に関する事

駒形山の駒の足跡石（爪形が二つ）。

馬船石（大干の節も此のたまり水は絶えた事が無い、この水を紙に湿して持ち帰り馬に食わせると、勢力を増し長生きをすると言つ）。

馬糞（前日頃にでもおちたかと思える生乾きの馬糞が丸いまま一所に十四、五程落ちていた）。

馬の尾の毛（峰近い木の枝に二、三十筋付いてい

(9) 特記事項

た。下山してから聞く所によると、古来より、この嶽に馬糞が落ちていて、瘧の病（熱病）などに用いればよく効くし、尾の毛は、お守りにすると人足寄り合い一、二寸ずつに切って配分持参したのと（と）。

濃ヶ池への雨乞いと黒川入りへの木出しの登山体験者がいるだけで、初めての駒ヶ岳登山に慎重に対処している。

検地の測量、絵図地図作成など学術的技術的な見分には及んでいない。

駒ヶ岳に馬がいる、半信半疑か、馬に関する土俗的伝承が古来少なくなかったことが察しられる。

安藤郡代の円満な人柄で全員絶頂を極め、安全で確実な登山技術が発揮されている。

『駒ヶ岳一覽記』は、形式にとらわれずよく書けている。最後の「山温順にして能く人を愛するとも申す可く候。誠に山多くありて神も在すごとき景風と感心仕候。」はさすがである。

二 阪本運四郎の駒嶽見分

- (1) 日時 宝暦六年（一七五六）八月十一日より十六日  
郡代 阪本運四郎（英臣）ほか役人九人  
宮田村役人・人足五十三人。  
自分山山見願い人 同行八人 計七十人。  
持参品 飯料のほか一斗入り水樽二つ 酒一斗 餅少々。
- (2) 登山コース  
十一日 高遠―宮田町。  
十二日 宮田町を朝卯の上刻（午前五時）出立―白心寺の脇道を小田切川へ出て、大田切川・黒川の出合（ここは井口といい、宮田五か村の用水を揚げている場所）―ひげすりいわ髭摺岩―分杭（上穂との領分境）―帰命山石地藏―中御所谷―清水という所の樵小屋に泊る。  
十三日 中御所の大なぎ―山伏谷・滝谷の滝―小横川渡（おびただしく畳み上げた大石）―大石や淵―大横川渡―大滝の下にて昼食―這松地帯―前岳五、六分目の這松の中に泊る。
- (3) 十四日 前岳の本峰（朝日が藪川岳と戸台岳の間から出るのを見る）―一の岳―尺丈岳―天狗岩―二の岳―三の岳―四の岳・四の峰―這松の中黒川の開きという所―大釣根―小尾根下に泊る。  
十五日 大釣根―小室岳―泥ヶ池―昼食、権現釣根（ここにて名所絵図など認める）―小出村に泊る。  
十六日（絵図など整理し）―高遠帰着。
- (4) 検地見分 歩詰 絵図 記録作成  
検地八箇所 分間絵図作成（岳々の命名 見図り 見積もり）  
所々見通し方角を記す（一の岳より十七箇所 二の岳より五箇所）  
探検事項  
竜馬の尾というものは、白樺のこけである。  
前夜、尺丈の岳に灯ともった火は、人足共が這松の中で、煙草を吸ったたき火の火であった。  
前岳より本岳へ行く途中、人足共が山男の足跡と見たのは、方々に熊の足跡があったことから熊の足跡の重ね踏みだろうということになった。翌日濃ヶ池
- (5) 十六日（絵図など整理し）―高遠帰着。  
検地見分 歩詰 絵図 記録作成  
検地八箇所 分間絵図作成（岳々の命名 見図り 見積もり）  
所々見通し方角を記す（一の岳より十七箇所 二の岳より五箇所）  
探検事項  
竜馬の尾というものは、白樺のこけである。  
前夜、尺丈の岳に灯ともった火は、人足共が這松の中で、煙草を吸ったたき火の火であった。  
前岳より本岳へ行く途中、人足共が山男の足跡と見たのは、方々に熊の足跡があったことから熊の足跡の重ね踏みだろうということになった。翌日濃ヶ池

の出口の沼に熊の足跡があり、その翌日泥ヶ池へ行く  
くと水は少しも無く、熊の足跡だらけで山男の足跡  
という疑いはなくなった。

鉄砲を発射して山荒れを試す。

尺丈ヶ岳の下の辺で、村役人や人足共が山で高声に  
騒いではいけない、と話して居たので訳を尋ねる  
と、高声して騒ぐと山が荒れると聞いた。そのまま  
聞き置いたが、尺丈ヶ岳の中腹の岩壁目がけて六刃  
玉を一発打ち付け、それから大石を尺丈ヶ岳の下へ  
落として声高に騒ぎ立てて見たが、何の山荒れも無  
かった。

濃ヶ池の上を見通すと、出口の方は雪が積もってい  
るので、頭を出した岩を目当てに鉄砲二発を発射し  
て召し連れた者共がかれこれ騒ぎ立てたが、何の異  
変も起こらなかった。

尺丈ヶ岳から勢州・三州・尾州の海面が見えると聞  
いていたが、勢州や尾州の方は木曾の山々に隠れ、  
三州の方は天狗岩に隠れ、駿州や遠州の方は前の  
山々に隠れて見えない。

(7) 特記事項

阪本郡代五十四才、前回安藤郡代の見分より二十年

を経ている。前回との関連は別に見られない。

「地理道図等の術業不鍛練に御座候へば云々」とは  
あるが、科学的な技術がいろいろと目立つ。

平地は歩行の数を以て、分間丈尺を定め、曲尺六分  
一町の割りの里数。山地は空眼に見通し引き合はせ  
中々難渋、見通しの朱引き。その他（検地技術 名  
所絵図作成技術 歩詰 行程分間概測 鉄砲や眼鏡  
濃ヶ池の水質見分など）

砲術家で特に土風の昂揚に努めた郡代らしい科学的  
実証的な態度が見られる。

鉄砲を発射して山荒れの実験をするとは、さすが。  
赤木や諏訪形の山持の一行八人の同行のこと。

三 阪本天山の『登駒嶽記』

- (1) 日時 天明四年（一七八四）七月二十三日より
- (2) 郡代 阪本孫八（天山）役人・御共計十六人 村役人  
八人・山案内・人足・石工（数人）等六十余人
- (3) 登山コース

二十三日 高遠―宮田―大田切川―黒川―ひげす

り岩。

二十四日 帰命山―北御所山―冷泉室―道士滝―  
中御所山―明王滝―大滝泊。

二十五日 九層の岩―三巨岩―這松の道―前峰―

馬の足跡石―真人峰―(勒銘石)―金策  
峰―天狗岩。

(4) 『登駒嶽記』序論 山名の由来とその全貌

山の形が駒に似ているところから名付けられた。昔のことは史料がなくてよく分からないが、今高遠から遠望すると、天辺には切り立った数個の峰、中程にはほら貝のような峰が雪を帯び、全体として駆ける馬のような形をしている。この形は四・五月頃にとりわけ鮮明で、両方の耳、片方の目、右側の口元、前の足、たてがみや尾などもはっきりと指摘される。

我が父は郡代の時この秘境に踏み入って見分検地し、分間絵図面などを作り、復命書を先君に献上しているが、概括するとこの山脈は東西に連なつて七十里(一里は六町)、東側は伊那谷で天竜川が遙かに流れ、西側は木曾谷である。その麓を南北に通ずる道は二百里程で、その間の宿駅は小野宿から飯田城まで十一宿に及んでいる。

(5) 登山見分

案内人を立て大田切川に沿い夜道を山駕籠にて登るも巨石道に突き出し途中より草鞋にて登る。

北御所や中御所の地名は、南朝の行宮あんくうの遺跡の名残か。先人(父)の宿所や絵図作成の跡を偲び、参考にする。駒の足跡石を賞す。「奇にして愛すべし、石上往々蹄痕有り、山駿の蹠せつちよう蹟せき(跳躍)せし所といふ」。

銘文を作り、平石に石工数人に刻ませる。(これは駒ヶ岳の前岳に勒銘石ろくめいせきとして残っている)

「靈育神駿 高逼天門 長鎮封域 維嶽以尊」  
(靈神駿ヲ育テ 高ク天門ニ迫リ 長ク封域ヲ鎮ム 維嶽以テ尊シ)

金策峰の北に天狗岩が険しくそそり立つ、その下は数千仞の崖でちよつと覗いただけでも目が眩んでしまふ。天狗の故事は星が地に落ちて炎になつたものともいふが、今は石となつてただ平和の世の中を見下ろしているだけだ。

(6) 特記事項

藩として三回目の見分登山である。前二回と関連した計画的な登山とは考えられないが、何かと先人

(父)の見分を偲んでいる。

時に天山三十八才、父見分してより二十九年後となる。

山名の由来は『信濃地名考』に拠っている。

山への秘話の奇談的な関心はないが、伝説伝承などは文学的に許容している。

終始歴史的文学的な見分登山であり、記録は未完成で、銘文も載せていないのはなぜか。

難解な漢字漢語を駆使した登山記で、文学的には兎に角、報告書としては公的性格を欠いている。

以上は江戸時代中期五十年間における高遠藩の三回の駒ヶ岳見分について、その報告書にもとづいて概略を述べたものである。この三回の見分はおよそ二十余年間の隔たりをもって行われているが、各回ともに実施の経緯についての資料を欠き、従って全体的にもこの事業の歴史的意義についての評価は今までになされていないように思う。

最初の安藤太郎兵衛による見分については、それまでの「高山險阻につき御検地に及ばず」ではいられなくなった時代的背景を中心に述べた積もりである。しかし見分実施の具体的な経緯というものはつまびらかでない。

初めてのことで素朴な見分登山ではあったが、それだけに慎重で敬虔で本質的な登山見分を行い、その一覧記は所期の目的を果たしている。終わりの「誠に山多くありて神も在すがごとき景風」との感銘を残し、今後の登山見分の必要を訴えている。

二回目の阪本英臣による駒嶽見分は、それまで人跡未達の未知な高山に対してさまざまに抱かれていた土俗的神秘的な伝承や疑問について、さすがは荻野流砲術家らしく科学的実証的なメスを入れていて、これによって地元の人々の半信半疑であった多くの事項が明確に実証された。

駒ヶ岳には山男も馬も住んではないこと、その他動物をはじめ大自然の実態に目を開かせている。

そしてその見分を当時相当に進んでいた算術や測量、絵図や地図作成の技術を発揮して検地し、駒ヶ岳を絵図や地図に記録している。これは其後の山の開発に大きく貢献している。

三回目の見分の隊長は、砲術家にして文学者の三十八才の若さの阪本天山であった。天山は父の駒ヶ岳見分の影響を受け、少年の頃から朝夕駒ヶ岳の英姿を仰ぎ、駒ヶ岳の歴史にも関心を持ち、何時の日にか頂上を極めたいと思っていた。たまたま若くして郡代という要職に就いた天山に

まさに時節到来、天山はかねての夢を実現しようとしたのであった。見分には父の残してくれた絵地図等のお陰で難路も首尾よく登り、その分だけ余計に高山の浩然の気を養うことができた。

天山が郡代として藩政改革に意を用いたのは、文武両道何よりも先ず土風の高揚であった。かねての夢、郷土の高峰に立って四海を見渡せば、手前を一羽の鳥が飛んで行く。天山は遂に、かの詩を口ずさみ、維嶽以て尊しと結んだのであった。



天狗岩 昭和39年 7月16日写

## 第五章 山麓の猛者

### 一 イノシシ騒動

駒ヶ岳と動物、といえは何よりも先ず馬のことになるが、その馬はやはり伝説や伝承的なものばかりであった。そこでまず高遠藩の駒ヶ岳見分記における動物についての見分を眺めて見ることにしよう。

安藤太郎兵衛の『駒ヶ岳一覽記』では、人足共が馬糞や馬の尾の毛を信じているのを批判的に記し、実際に見た岩鳥・岩鹿・猿などを書き上げている。

また阪本英臣の『駒嶽見分復命書』では、人足共が山男の足跡である、というのを熊の糞の多い事例から熊の足跡であることをはっきりと見届けている。

阪本天山の『登駒嶽記』では、「鳥あり、鶉身にして鷺の翼、脛に毛あり翔りて延松に雙蔓す、其名を知らず。」とか、馬は勒銘石の神駿となり、さすがは文学の世界となっている。

時代はずっと下るが、昭和十五、六年頃の上伊那郡教育

会の調査記録の『駒ヶ岳研究』では、哺乳類の目録の中に、ニッポンサル・ツキノワクマ・カモシカなどが見えるが、注記として「イノシシ・ヤマイヌ・シカなど明治初年頃、本山脈にて見たりとの由なれども現今はその姿を見ず、あるいは絶滅せしかと考えらる」とある。

さすがにウマはもとよりヤマイヌも挙げられていないのは頷けるが、当時イノシシが見られなかったのは何故か、とちよつと不思議である。

近頃伊那地方はもとより県内各地で里山近くにクマ・サル・イノシシ・シカ・カモシカなどが出没して田畑を荒らし、熊は人畜にも被害を与えたりするのでこれらの駆除対策については何処の市町村でも毎年手をやいているところである。

特に今年（二〇〇一）は春先の五月初め頃からアヤマの自生地で名高い伊那市西春近の野田山の湿原が每晚猪に何回か掘り返されてその被害が大きく、開花を前にアヤマ園の管理者を悩まし、イノシシからアヤマを守れと話題になった。その挙げ句は雷電棒とかを三基設置してイノシシが近づくと録音された犬の鳴き声が流れたり、フラッシュが光ったりして音や光でイノシシを威嚇して侵入を防ぐのにやっと成功したようであったが、話題は野田山という地

名考にも発展した。

地名研究によると、もともと野田山の野田というのはニタ・ヌタ・ノタなどに通ずる地名で各地の分布調査から吟味すると、ニタは湿地など、ヌタは泥田や沼地、ノタは泥などの意にまとめられ、野田山は野田のある山、つまり泥地や湿地のある山ということになるという。

ところがイノシシは体温を下げたり、体に付いたダニなどを取り除くために泥沼を転げ回って好んで泥んこになる習性をもっていて、昔からイノシシの好む湿地をヌタ場といい、そのヌタ場のある山を野田山と呼んだわけである。

イノシシはアヤマの根を食ったり、泥の中のミミズを食おうとしてアヤマ園を掘り返したかも知れないが、野田山はもともとイノシシたちの先祖伝来のヌタ場であったわけである。

伊那市西春近の小出から蛇石山を経て駒ヶ岳の麓一帯は野田山と呼ばれ、その名のごとく昔からイノシシが好んだ生息地であった。駒ヶ岳登山道の内ノ萱コースの桂小場ぶどうの泉沢を過ぎ一キロメートル程行くと、野田山の内の野田場に達する。湿地や湧水の状況は時代とともに変化しても野田場という地名はイノシシの遺跡として残っているわけであろう。

## 二 イノシシの本場

イノシシは東北や北陸地方のような深雪地帯には生息せず、長野県内でも降雪量の割に少ない美ヶ原高原から鉢伏山（一九二八・五m）以南の低山帯に生息するという。

伊那谷では多くは天竜川右岸、中央アルプス裾の低山帯の森林に分布している。現在、中央アルプスの東山麓一帯、北は辰野町北部から下伊那に至るまで全市町村にわたってイノシシの生息分布が見られる。

これに相対して二ホンジカは主として天竜川左岸の南アルプス山麓一帯に生息しているという。

前述の駒ヶ岳の哺乳類の注記から考えてもこれらの生息状況は、時代により変化は大きいかもしれないが、江戸時代の伊那谷におけるイノシシの生息振りは、現在の状況を遙かに上回るものであったかもしれない。それは今なお残る猪垣などの遺跡や地名や古記録などによって知ることができる。

### (1) イノシシの遺跡や地名

猪垣は猪土手、鹿土手、猪堀あるいは猪除けなど所によ

#### 猪土手の遺構（右）

辰野町宮木湯舟 昭和59年11月写

#### 復元された猪垣（下）

伊那市西春近諏訪形 平成13年4月写

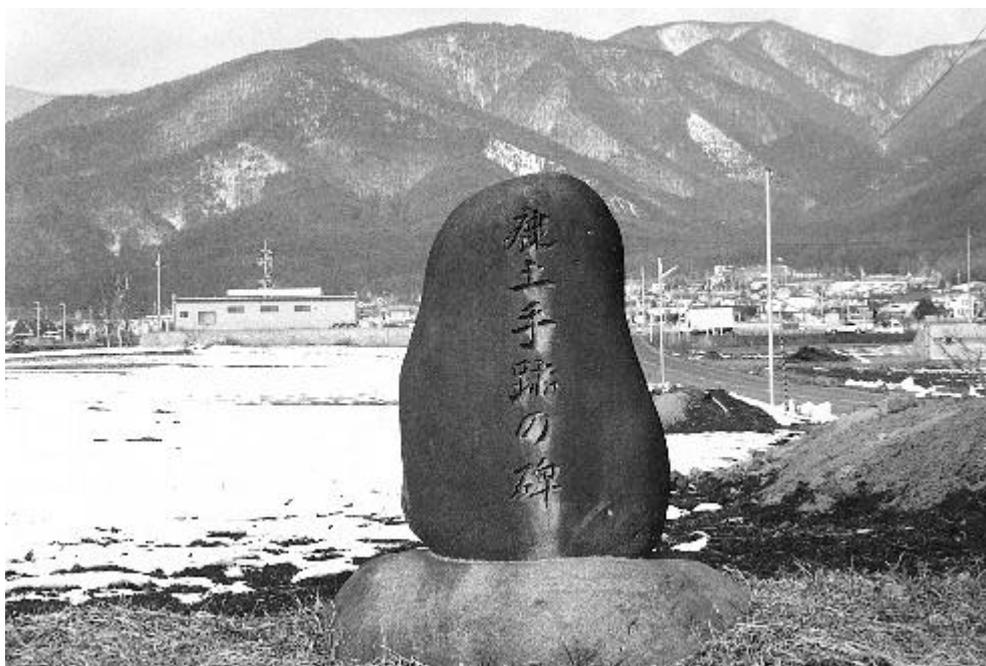


り、あるいは時代によりいろいろに呼んでいる。これは山から里へ下りて来るイノシシをくい止めるための一連の深い空堀のことである。堀をより深くするために盛り土を多くして土手や柵を主とすれば猪土手（鹿土手）となり、今でも各地にその一部が残っている。

自分の家の田畑を守る為に自分で猪土手を作る場合もあるが、これは誰でも出来ることではない。大概は村々で協力して築造に当たったわけであるが、その維持管理も大変なことであった。

猪垣の築造は元禄以前に始まっているとも推定されているが、確かな記録の例としては、上古田村（現箕輪町）の享保二十年（一七三五）に二十三町の猪土手の新築や寛保元年（一七四一）に再普請されたという伊那市西春近から宮田村にかけて凡そ二里の猪垣などがある。

箕輪町大出の高橋神社の西方西天竜幹線水路右岸百メートルばかりの西寄りに「鹿土手跡の碑」というのが建てられている。此処には最近まで昔の鹿土手が所々に残っていたのでそれを記念して昭和五十六年（一九八一）に建立したものである。享保十二年作製の村絵図に「鹿土手」と書き込まれていることから築造の古さが偲ばれるが、此処に立つと、西山山麓から二キロメートルも下った平坦地にも



ししどて  
鹿土手跡の碑（箕輪町大出）

昔は猪が出たのかと驚く。

そしてこの例から考えると、猪堀や猪土手は最初から山麓ばかりでなく、長い時代の間には里から山麓へと移動したこともあったのかと考えさせられる。

イノシシは夜行性の動物で夜中に出没して田畑を荒らした。水田では乳熟期の稲穂が好物で、それを食べる為に例の又夕場よろしく転がって食い荒らし、畑は芋でも人参でも掘り荒らすので、その惨状は俗にイノシシの馬耕といわれるほどであった。百姓の今までの丹精は一夜にして台無しになってしまふ惨めさであったが、所によっては今でも同じような被害を受けている所もある。

田畑の全てを猪垣で囲むわけにもいかず、むしろ猪垣の無い田畑の方が多く、また猪垣があればそれで安全ともいえず、田畑を守るにはどうしても夜番をして猪追いをする必要があるであった。田畑の近くに小屋を造り、其処に詰めて火を焚いたり、イノシシの嫌う臭いを発散させたり、音を立てたりして夜中猪追いに努めた。その詰所を猪小屋と呼び、猪小屋が方々にあったのでその名が地名となつて残つたのである。今日猪に關した地名が少なくないのは、猪が如何に農民を苦しめたかを物語る証拠であろう。

では駒ヶ岳の山麓地方でイノシシに關する地名を拾つて

見ると、次のようなものが挙げられる。

野田山	野田場	野田原	猪山
猪沢	井の久保	猪小屋	猪ノ子原
鹿おとし	猪垣	猪土手	

なお伊那市では、野田山の麓の諏訪形の猪垣の一部を復元して昔の農民の苦勞を偲ぶよすがとしている。

## (2) 猪鹿発向

江戸時代の古文書や古記録を見ると、猪はイノシシ、鹿はカノシシといい、「猪鹿」と書いてこれを「しし」と読み、猪鹿が山から出て来て田畑を荒らすことを「猪鹿発向」（ししはっこう）といっている。

箕輪町上古田の大板屋の家記「年々日記」の享保二十年（一七三五）には「猪鹿正月より大分発向、人家の軒下迄掘りちらし、青麦、つくね芋を喰事限りなし、当村、南はばに土手をつき、木を植ること三月朔日、二日両日に成就せり、両方にて二十三町あり」などあり、猪鹿発向が頻繁で方々で猪垣や土手を築いて猪鹿発向に苦しめられた事が分かる。

また文政三年（一八二〇）の高遠藩の村々困窮訴え（『御領内助加村之難洪書上』）の中から駒ヶ岳山麓の村々

の難渋事項や困窮事項を拾ってみると、

下牧村 天竜川三峰川荒川 橋流れ山高く荒所多く

猪鹿発向

表木村 田切大田切荒川 猪鹿発向

中越村 田切大田切荒川 猪鹿発向

宮田村 駒ヶ岳麓諸作不熟 冷害 猪鹿発向

猪土手費用人足莫大

などがあり、この年駒ヶ岳山麓の大小の田切川は洪水で荒れ、冷害に加えて猪鹿発向も多く、猪土手修理に費用人足莫大であつたことがうかがえる。

こうした村々へはその村の実情によつて領主から威鉄砲や獵師鉄砲が何挺も貸し出されて鳥獣害防除の対策とされていた。しかし村では獵師を頼む給金や火薬代で村入用のかさむのを嘆いたりしている。

また村々の難渋に対して領主は減税を余儀なくされた。

例えば羽広村の元禄十四年の免状には「猪喰引き」という一項がみられる。つまり猪鹿発向によつて減収が見込まれるので村高からその分だけ控除して租税対象からはずしたわけである。

また三峰神社へ猪鹿防ぎの代参の例さえあり、猪鹿発向に悩まされた農民の苦勞の数々がしのばれる。

### 三 猪肉調達の廻状

延享四年（一七四七）十一月、飯島陣屋代官大草太郎左衛門は、支配村々名主当てに朝鮮人来朝につき猪肉調達の廻状を發した。そのおよその内容は次のようである。

来年四月朝鮮人来朝につき、遠州宿々の賄所へ猪肉十六疋分を納付するよう当役所へ仰せ付けられたから、村々申し合わせの上、この冬中に打ち取り塩肉にして置くこと。

なお、その割り付けや塩漬けの方法などについては、来月十日の御年貢上納の日に申し渡すから、もしそれまでに猪を打ち取った村では早々申し出ること。というのであつた。

年貢上納の十日の申し渡しは再び廻状となつて飯島町等の村々に回つた。その村々は飯島町・石曾根村・南割・中平・北河原・小町屋・上赤須・南下平・北下平・市場割・赤須町の締めて十一か村で、差し出す猪は式疋であつた。

猪肉塩漬けの仕様については、

胴などは不要、四足に十分肉をつけて切り取ること。

猪と直ぐ分かるように爪より五、六寸の所まで毛皮を付けて置くこと。

その外は皮をはぎ、肉ばかりを骨に付け、肉深き所へは包丁を入れ塩をよく滲みこませること。

一疋の四足を一桶ずつに漬ける、蓋をよくして腐らぬように注意し、村毎に保管すること。

等々が挙げられ、差し出しは沙汰次第致すように、また惣村で申し合わせて余計に用意して置き差し支えの無いようにせよ、というのであった。

なお、この朝鮮人来朝とは、室町時代から江戸時代まで行われた朝鮮通信使の事で、ここでは寛延元年四月に行われた来朝である。この朝鮮使節の大坂江戸間の陸路往復の道中の接待に沿線の諸大名は幕府の命によりその負担が少なくなかった。飯島陣屋は駿府陣屋の支庁であったので、駿府陣屋から東海道の遠州宿々泊休御所への負担の一部として協力させられたわけであろう。

日頃百姓の敵ともいふべき猪ではあったが、この猪肉調達の課役を村人はどんな気持ちで果たしただろうか。

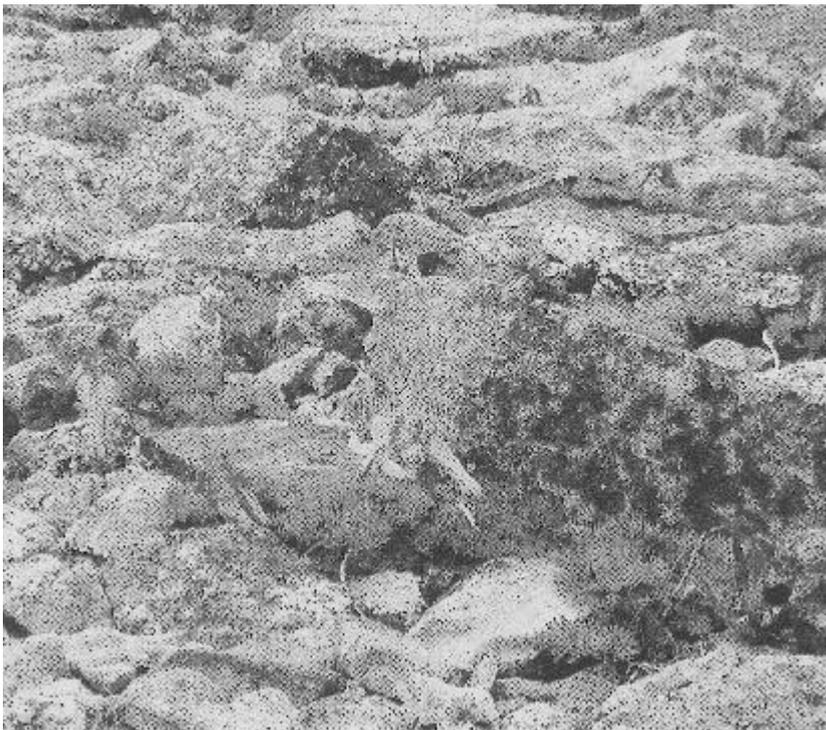
## 第六章 コマクサの今昔

### 一 コマクサの群落

平成十三年七月にはいくつかの新聞が、中ア駒ヶ岳にコマクサの咲き誇る写真入りの記事を掲載した。西駒ヶ岳にコマクサの群落とは珍しく、七月十七日の『信毎』には、その経過について大凡次のように述べていた。

将棊頭山の西駒山荘の脇では、ピンク色のコマクサが今咲き誇っている。これは地元が六年ほど前に駒ヶ岳に「再生」を目指して植栽活動として植えてきたもので、同山荘の話ではここが「中ア随一」の規模で、百平方メートル程の群落に広がっている。

この運動に最初に着手したのは、伊那市御園の和木千馬男さん(七六)で、現木曾郡上松町の小学校時代に先生から校章のコマクサは西駒ヶ岳に咲いていると教わった。ところが、たまたま昭和四十八年(一九六三)に駒ヶ根営林署に赴任してみると、駒ヶ岳にはコマクサは無かった。ショックを受けた和木さんは、北アルプスのコ



長野日報（平成13年7月17日）

マクサの種を貰い受けて適地を探して蒔いた。しかし、思うようにはいかなかった。そこで群馬県の仲間から種や苗を求めてまた植栽に努めた。

西駒山荘脇のコマクサは、平成二年（一九九〇）と同七年に集団登山の地元中学生によって苗を植えたもので

ある。再生・増殖活動は、同営林署を中心にした高山植物等保護対策協議会によって続けられてきたが、二年前で活動は停止して後は自然増殖に任せている。

南信森林管理署駒ヶ根森林管理センターによると、西駒山荘脇以外の約二十カ所の調査では、昨年約千四百本余を確認、全体的には「横ばい傾向」とのことである。

中アのコマクサは薬草とするための乱獲で、終戦後には絶滅していたと言われる。一方では、もともと駒ヶ岳には自生していなかったとの意見もある。  
と結んでいる。

また、「長野日報」でも、同じ十七日版に、美しい写真に「岩の間から花を咲かせる人工増殖地のコマクサ」の解説とともに「コマクサかれん」中ア駒ヶ岳順調に生育」の見出しで

駒ヶ岳の一带に人工増殖されたコマクサが今年も順調にピンク色の花を付けている。中央アルプスでは昭和初期に絶滅したとされるが、高山植物保護対策協議会伊那地区協議会が昭和五十二年から二十年余りにわたって、人工増殖を続けてきた。しかし近年は発芽率が毎年二千株前後で安定。このため、毎年夏に行ってきた種まきなどを昨年から一時中断し、自然増殖が可能かどうかの経

過観察を続けている。今年はその二年目。同協議会は八月中にも山に登り、生育状況などを確認する。と記している。

ここでも絶滅したコマクサの人工増殖による順調な生育のニュースであるが、その絶滅の時期とは昭和初期か、終戦後か。また後者では触れてはいないが、もともと自生していなかったとの意見というのは。その他読者の中には、それぞれに関心を抱いた人もあったことであろう。

## 二 駒ヶ岳における植物調査

前掲の『信毎』の記事にあるように、西駒ヶ岳にコマクサを再生させようと最初に着手したのは伊那市の和木さんで、そのことは早くも昭和五十三年（一九七八）十月七日の『信毎』に報道され、かねて西駒ヶ岳にはコマクサの自生は見られないと認識していた辰野町平出の茅野益穂氏は意外なことに驚き、以来この問題にこだわりを感じ、植物専門の立場から執拗なまでに調査研究を続け、その中間報告として平成七年に「コマクサの古典を追って」と題する論文を発表している（『伊那路』第39巻第4・6号）。

これについては後に紹介するが、本書においてもコマク

サに関するそうした課題を踏まえながら、特に第四章の高遠藩の駒ヶ岳見分記では、植物についての見分観察も特記してはきたが、コマクサはもとよりこれに関することは見られなかった。

しかし、今回コマクサのこうしたニュースもあり、この問題を素通りにするわけにもいかないのが、駒ヶ岳の植物面にも広くスポットを当て、特にコマクサに関して尋ねてみることにする。

巻末の駒ヶ岳年表を一覧して気づくことは、江戸時代には薬草やその採集などにかかわる事項が多いことである。

これは我が国の本草学の発達普及によって山野に薬の原料となる動植物等の採集が盛行したからである。

実際にはどんな植物が薬種として採集されたか詳しいことはよく分からないが、例えば駒ヶ岳山麓の光前寺では、古くから仏薬建中丸という薬を作ってきたが、その原料には開山本聖上人伝授の寺山の植物を用いたと伝えられている。その他江戸時代には、木曾では百草など、伊那でも養命酒やカツパの妙薬を始め駒ヶ岳山麓の村や町には薬を製造販売する生薬屋が少なくなかった。それらの薬種はいずれも秘伝ではあったが、一部は深山幽谷の地に求められ、とりわけ高山植物が採集されたに違いない。その一つにコ

マクサもあつた。ちなみに『図説草木名彙辞典』（柏書房 平成三年）によれば、駒草はケシ科の多年草で自生し、御駒草・金銀草、和名駒草は花弁を馬の顔に見立てたものか。高山植物の一。薬用として種子は腰痛止め、葉は靈薬とある。

しかし、薬種としてはもとより、西駒ヶ岳におけるコマクサに関する資料は、木曾でも伊那でも不明である。

それに巻末の駒ヶ岳年表でも分かるように明治以後は、専ら植物学的調査研究が多くなっている。まず茅野氏の調査研究の紹介によつて、今日的な問題に迫りたいと思う。

### 三 コマクサの古典を追つて

駒ヶ岳にコマクサの種蒔きが試みられた経緯については前述のようであるが、昭和五十三年十月七日の『信毎』には

「コマクサよ、よみがえつて。宝庫だった中ア駒ヶ岳、祈りを込めて種まき」という見出しで「駒ヶ根営林署や駒ヶ根市博物館によると、昭和の初めまでは、中ア駒ヶ岳周辺は群生地も多く宝庫とさえいわれた。ところがコ

マクサは胃腸薬として知られている百草の原料で、大正後期から乱採取され続け、昭和三十年代に入つてからは、一本も確認されていない」と報じられている。

草や木の研究に生涯をかけた父のもとで、かねて駒ヶ岳にはコマクサは無いものと認識してきた茅野氏は、認識をくつがえすかのようなこの記事に驚き、このことに大きなこだわりを抱くようになった。

#### (1) 西駒ヶ岳の植物誌

そしてこのことから先ず西駒ヶ岳における植物調査記録を調べ、次の記録についてコマクサの記録の有無を調べてみた。

『日本アルプス登山案内』矢沢米三郎・河野齡蔵著（大正五年 岩波書店発行）

『自然研究調査記録』上伊那郡教育会編（大正九年）昭和四年）

『上伊那郡植物誌』小泉秀雄編（昭和五年 上伊那郡教育会）

『上伊那郡植物総目録』小泉秀雄校閲（昭和六年 上伊那郡教育会）

『駒ヶ岳研究第二輯』（昭和十八年 上伊那郡教育会）

『日本アルプス植物誌』小泉秀雄調査（昭和三十二年  
横内斎）

『上伊那誌自然篇』（昭和五十三年 上伊那誌刊行会）

『伊那市史自然編』（昭和五十六年 伊那市史刊行会）

その結果、これらのいずれにもコマクサの記載は見られなかったが、次のような問題点に気づいた。

まず第一には、高山植物の学術調査では県下の先駆をなすもので、これに西駒ヶ岳のコマクサの記載のない事が後々まで影響して、自生していなかったということになっていくかもしれないこと。

第二には、第二章第三節の「西駒ヶ岳高山帯」の項で、柄山祐希氏は「コマクサは、乗鞍岳や八ヶ岳のような火山帯には見られるが、仙丈岳や西駒ヶ岳には昔から自生していなかった。しかし、最近、移植したものがあのように分布学的には問題外のものである」とあり、自生していなかったことを明確に述べていること。

第三には、右に掲げた八の植物調査記録とは別に、柄山氏は『中央アルプス西駒ヶ岳登山案内』（昭和四十一年第四版 上伊那教育会発行）の高山植物図版に、

「注。次頁より掲げた植物の原色図版の中で、コマクサとウルップソウは中央アルプスには見られないが、高山

植物の代表的なものであるので、参考のため敢えてここに載せた。」

とあくまでも参考のために載せているというのである。

こうして西駒ヶ岳における植物調査記録を丹念にひもといてみたのであるが、コマクサの自生についての記事は発見されなかった。しかし「昭和初めまでは、中ア駒ヶ岳周辺は群生地も多く宝庫とさえいわれた」と新聞が報ずるからにはそれなりの論拠があるに相違ないと、当事者である駒ヶ根営林署に照会したところ、次のような回答を得た。

一八八〇年、矢田部良吉が採集したコマクサの標本が帝大標品目録にあり、信州駒ヶ岳産となっていて、日本でコマクサの最も古いものである。

享保四年（一七一九）に幕命により野呂源次が、西駒ヶ岳に薬草採集に登山し、コマクサやトウヤクリンドウを採集した。

地元飯島小学校の校歌には、コマクサが歌われており、校章にはコマクサが図案化されている。

これによって茅野氏のコマクサへのこだわりは一段と飛躍して、早速身近な飯島小学校の沿革史にあたってみた。その詳細を知ることではできなかったが、和田清著『校章の自然誌』（昭和六十年）の中で、飯島小学校については

「南駒ヶ岳にあったコマクサを図案化。昭和四年改正。明治初年開校。」とあり、コマクサの項については、

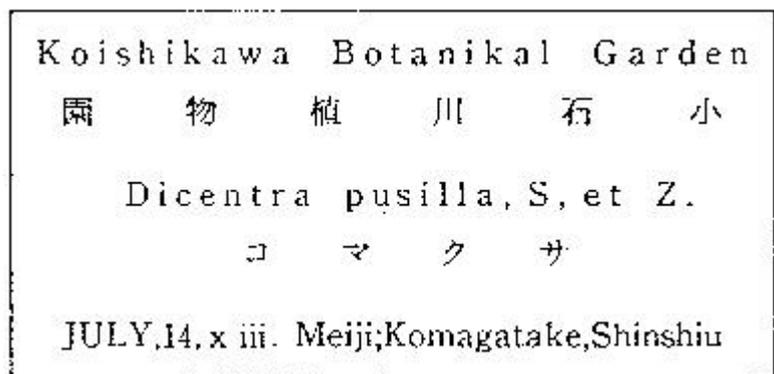
「中央アルプスや南アルプスでも、昔はコマクサが生えていたという人もいるが、今は見当たらず確かなこととはわからない。ただ、木曾駒と南駒をはさんだ東西の学校が、かなり古い時期にコマクサを校章にしていることは興味深い」とあることから茅野氏は「コマクサの自生の事実を物語っているというのである」と結び、一応承服の体で野呂源次の事にはふれずに、今度は専ら 矢田部良吉の標本のことに取り上げた。そして何とかそれを見たいものと思いつつもどうすることもできず、それから年月が流れた。

## (2) 矢田部の標本を観る

東京の小石川植物園にその所在と閲覧方を問い合わせ、東京へ出掛けたのは、平成六年二月十四日のことであった。

そしてこの日、東京大学総合資料館で心ゆくまでに、日本最古のコマクサの標本を閲覧し、次のように記している。

「もう一世紀も経過したという標本であるが、あのコマ



実だが、と彼はいろいろな思いを抱きながら東大総合資料館を後にしたのであった。

## (3) 『木曾薬譜』を追って

大きな期待をくじかれた彼は、それでもと今度は野呂源次の薬草採集のことの追求にかかった。

先の駒ヶ根営林署の返答を再び吟味すると、実はこれは

クサの花特有のピンクの色は少しも褪せることなく、あたかもつい最近作成したばかりの標本のように鮮やかな色を見せている。標本台紙の右下部には、採集データを物語るラベルに左記のような記載がなされ貼られていた。

(コマクサ 明治13年7月

信州駒ヶ岳)」

信州には二つの駒ヶ岳がある。この記述だけでこれを西駒ヶ岳としてよいかどうか、

矢田部の採集記録があれば確

上伊那教育会発行の『中央アルプス西駒登山案内』に拠っていることが分かった。手持ちの同書の「西駒ヶ岳登山略史」の項には、

「同じ年に（享保四年）野呂源次が薬草採集のために登山しています。そのとき『木曾薬譜』という本を著し、以後薬草採集のために山へ入る人が多くなり、木曾の薬種として日本中に知られるようになりました。この時、コマクサやトウヤクリンドウが採集されています。」

と記されているではないか。そこで今度はこの『木曾薬譜』をどうしても見なくては、と先ず長野県立図書館に向いたが見当たらず、次いで東京の国会図書館に出向いた。しかしここでも『木曾薬譜』は無かったが、さすがは国立図書館である、似たような書名の『木曾採薬記』という書物を発見するとともに、かねて見たく思っていた上野益三著『日本博物学史』をも閲覧することができ、野呂源次の手により成ったという『木曾薬譜』は、信州福島の人三村道益の著作であることを発見した。それに思いがけなく知った『木曾採薬記』という本は、尾張藩薬園監守水野豊文の御嶽採薬登山の記録で、次のような記事も発見した。

「コマクサ 絶頂二近キ所ニアリ此草御嶽へ登ル者八御

嶽山ノ御駒クサトテ皆採リ帰ル因ツテ採尽シテ今甚稀ナリ」

当時、西駒ヶ岳にコマクサがあれば、きっと関連の記事もあつたかもしれないなどと思いつつ肝心の『木曾薬譜』にはまみえることも出来ずに東京から帰り、夢は次第に木曾路へと飛んだ。

薬の事だから最初に、先ず木曾の製薬会社へ尋ねて見たが駄目で、長野県薬剤師会へ尋ねてご覧なさいと教えられ、ここでは『長野県薬剤師会百年史』という本のあることを教えられ、今度は町内の薬屋さんから同書を拝借して見たが、新しい事実は発見できなかった。

そこで木曾の友人知人に手紙や電話で種々問い合わせた。『木曾薬譜』のことは、『木曾福島町誌』にも発見できなかったが、これを参考にしたといわれる信濃教育会出版部編『明日を築いた人々』に「薬草を世に出した人」として三村道益が採られていることなどを知ることができた。この本ならばわが書架にもあり、心新たに見ると

「木曾の山の中に生えている九〇種類もの薬草の絵や、その草の薬としての使い方などを書いたその本は、のちに『木曾薬譜』という名まえで世の中に発表されましたが、それは、日本でも有名な本だということです」と述べられ

ていた。

その後木曾大桑村教育委員会の奥村氏から『木曾薬譜』は木曾には無いようだ、木曾郷土館には江戸時代の植物の押し葉があること、また『木曾薬譜』は名古屋の蓬左文庫にもないとのことなどを調べて、教えてもらった。

なお勧められた徳川林政史研究所へも問い合わせしてみたが、やはり無いとの返事だった。

しかし、さらに三冊の本からの関係資料のコピーが送られてきた。

『西筑摩郡誌』には、人物誌に三村道益の墓碑銘中に「著す所木曾薬譜若干巻あり家に蔵す」とあったが他には触れず、『三岳村誌』と『御嶽の信仰と登山の歴史』の中の「採葉登山」の項は、ともに生駒勘七氏の執筆で木曾谷の本草学と御嶽の事に種々触れていて、木曾福島郷土館に天保年間の「おしば帳」があること。幕府や尾張藩の薬草園に木曾から沢山の薬草を送っていること。薬草採取に江戸から丹羽正伯や尾張藩から水谷豊文などの本草学者が木曾へやってきていることなどいろいろ学ぶことができた。

木曾のこうした環境の中から『木曾薬譜』三巻を著した三村道益や「おしば帳」の作成者小倉為助など本草学を志す者が出たのは当然の事と思っただが、三村道益については

山村家の侍医の家に生まれ、尾張藩儒松平君山（秀雲）に学んでいることの外は『木曾薬譜』については相変わらず幻であった。

そこで、もしかその「おしば帳」にコマクサが、との想いに駆られること久しく、その後機を得て、木曾福島郷土館を尋ねて小倉為助の「おしば帳」を親しく拝見することができた。「おしば帳」は教科書大の木曾谷全域南北二冊の内の北一冊で御嶽や西駒ヶ岳の山頂近くの高山植物もあつたが、コマクサは無かった。

しかし、天保十五年四月から七月にかけての採集成の百五十年以上を経た完全な押し葉に対しては、感慨もさぞかし深いものだったと思う。

その後、奥山氏からは昭和九年の『第一次信濃』の中に、木曾の家高荒次郎の「三村道益と木曾薬譜」の論文を発見したからと、そのコピーが送られてきた。

この論文で「山村氏留書抜粹」に、享保五年丹羽正伯の薬草採取の木曾巡村につき

「主として山岳方面を探索したものの如く、南は上松迄で、九月二日正伯自身黒沢から御岳山の麓三里程奥迄行って二十三種採取。別に駒ヶ岳方面へは随行の野呂源次、本賀徳運、桐山太右衛門の三人を遣わし、大原（日

義村)に於いて五十六種、それより三里程駒ヶ岳山麓を攀じて十二、三種を採取し、六日荻曾を経て奈川泊りで稲こきへぬけている。」

とあることにより、上伊那教育会発行の『中央アルプス西駒ヶ岳登山案内』の登山史の項の中の野呂源次のこと、これに拠っていることが分かった。

さらに家高論文は、三村道益の人物誌にもふれてはいたが、『木曾薬譜』三巻については、「この書木曾に遺らず、徳川侯爵家文庫に第一巻のみ現存すというけれども、私は未だみせていただく機会をえていない」とあり、奥山氏等の協力に限りない感謝を抱いたものの、茅野氏の木曾への期待はまた頓挫せざるを得なかった。

#### (4) 再び『木曾薬譜』を追って

やがて退職して家にいる身となり、生活もしだいに落ち着いてふたたびよみがえって来たのは、『木曾薬譜』のことであった。

県立図書館もだめ、国会図書館もだめ、しかし未だ薬学部付属図書館などが残っているではないかということ、で、国公立大学などの薬学部はこの書の有無を照会したのは平成六年一月の事であった。

全くの私的な依頼にもかかわらず、九十パーセント近くの返答を戴いたが、残念なことにいずれも無しという返答ばかりであった。

その後、辰野町誌編纂室で三浦孝美氏から『長野県史』近世資料編に、木曾と高遠の二つの『産物書上帳』の載っていることを教えられ、尾張藩の「享保年中 谷中村々産物書上 信州筑摩郡木曾村々産物」を見ると、御嶽山麓の大滝村の項には、はっきりと「一 駒草」とあり、コマクサの自生が認められたが、これに対して「享保二十年十一月 高遠領産物書上帳」には草類列举の中にコマクサの名は無かった。

#### (5) 再び駒ヶ岳の植物調査誌に

大正十年八月、上伊那郡教育会自然研究調査班五名は、内ノ萱から登山し、宝剣岳を越えて極楽平に下り、南駒ヶ岳からオンボ口沢を七久保に下り、初めて駒ヶ岳連峰の完全縦走を成し遂げた。

次いで同十三年には同自然研究調査班一行二十一名は、七月二十八日より八月三日まで、小泉秀雄氏を指導者として中央アルプス縦走植物調査を実施した。

これらは駒ヶ岳の学術調査として画期的なことであっ

た。この時採集した標本二百余种は郷土館に保存されているし、また、この時の西駒山彙植物目録は、その後昭和八年から十二年に至る五か年間の数回にわたる調査記録をも加えて「木曾駒ヶ岳植物目録」として、十八年発行の『駒ヶ岳研究 第二輯』に編集され報告された。

しかし、この時の中堅委員であった木下義男氏が克明に綴った調査記録は、翌十四年に植物記載目録だけは小泉先生の校訂を受けてあったが、全ては長らく筐底に眠っていたのであった。

昭和三十二年一月、月刊『伊那路』が創刊されると、その編集委員であった木下氏は、時節到来と大正十三年の旧稿を「中央アルプス縦走植物調査概況」と題して八・九月号に発表したのであった。

そしてこの初期の『伊那路』十巻は、昭和六十一年に復刻された。ところがこの復刻版の木下氏の長い調査記録の中に茅野氏は、実に思いがけない記述を発見したのであった。

「天水岩から尾根を伝って中箕輪小学校生徒遭難記念碑に黙祷を捧げ濃ヶ池に向かった。コマクサ・クロユリ・ヒメウスユキソウ・キバナノシヤクナゲの四品種絶対禁止の制札が立っていたので一同にも注意を願って歩を進

める。」

これには全く驚いた。

駒ヶ岳の今までの植物調査目録に自生が認められていないコマクサが、営林署で立てた制札の採集禁止品種にあげられていること、それにもかかわらず調査記録（自大正九年至昭和四年自然研究調査記録）にはコマクサのことは何も書いてないこと。

さらに驚いたことは「ヒメウスユキソウの豊富なのに一同眼を見張る」とか「雲海、さてはヒメウスユキソウの群落に、蓋しカメラ日和というものであろう。」などと記し、クロユリやキバナノシヤクナゲについては観察の時点で、他の植物と一緒に書いて、特記していないこと。等々不思議に思われること多々ではあるが、営林署でコマクサの名のある制札を立てていることは、大正十三年当時にはコマクサが自生していたことになるか、それとは別にこの制札は西駒ヶ岳だけに限らず、高山植物保護のため方々の高山へも一斉に立てられたものであったのか、制札への思いはすっきりしないまま行き詰まってしまった。

そしてこれまで次から次へと、多くの人々の協力を仰ぎながら何年にもわたって追い求めてきたコマクサの古典

は、文字どおりの追求、追究、追窮のまま、

矢田部標本に信州駒ヶ岳と書いてあるのは、果たして西駒ヶ岳のことか。

採集禁止品目にコマクサの名の見た大正十三年の営林署の制札は西駒ヶ岳に限って建てられたものが。

などの二点から、「自生 乱採集 絶滅？」

「でもコマクサは西駒ヶ岳には自生していなかった、と私は学んできた」との執念を捨て切れずに、何とも決しきれないもどかしさのまま、その古典探求の最後は、

「生物の生命現象を研究して行くのに、自分は歴史的な物の見方や考え方が欠如していた」との深い自己反省と、

「もともとなかった所に植物を植えるとか、同じものであれば、何処のものでもよいというような自然への接し方は、真に自然に親しむ者のすることではない」との厳しい自戒をもって結びとしている。

茅野氏の研究意欲のたくましさや追求の根気強さには研究者の龜鑑として敬服の極みである。そしてその過程においてはいろいろな研究機関やいろいんな人々の協力の賜物の多かつたことにも驚く。

また研究資料は、思いがけない身近にも有ることなどを

教えられ、誠に心ここに有らざれば見れども見えぬ、聞けども聞こえずである。

茅野氏のコマクサの古典の追求はこれで終わることなくまだまだ続くことであるが、この問題は生命現象にかかわる一研究者の研究手法の自己反省や植物栽培についての自戒で終わるべきものではない。

長野県は、昭和二十六年（一九五二）に西駒ヶ岳を中心とした中央アルプス一帯の自然を保護するために県立公園第一号に指定している。以来半世紀が過ぎているのに、地元ではこの自然公園に関する認識も関心も全く見られないのが、今回のコマクサ再生の一件といえよう。

県立公園指定区域を持つ市町村の観光案内に中央アルプス県立公園の記載もなければ、また最近の大作『伊那谷の自然』にさえ中央アルプス県立公園については、その一語さえ見えない。誠にナンセンスと言うべきであろう。

観光一点張りでなく、県立公園の趣旨に基づいて今こそ中央アルプス一帯の自然の保護と利用に努めなくてはならないと思う。

## おわりに

郷土研究にたずさわっていると、登山や観光だけの駒ヶ岳ではなく、郷土の生活のいろいろなことに駒ヶ岳が関係して、しかもその歴史の古さに驚く。

中学生の頃、時折に上伊那学生団の「流るる河は一百里、聳ゆる山は数千尺」を唄ったり、「駒ヶ岳巍々然として四時白皚々、天竜河溶々乎として長へに滔々たる吾が郷郡」などを音吐朗々口ずさんだりして駒ヶ岳へのあこがれは自然と高まり、五年生の夏にはついに数人の仲間と一泊登山をすることとなった。今では想像もつかないような出で立ちで家人には随分と心配をかけたが、雨具兼用の花ゴザで濃ヶ池の雪渓を滑ったことなど懐かしく思い出す。

今では駒ヶ岳という名の山が全国で二十以上もあり、関係市町村で駒ヶ岳サミットも開かれているというから驚く。駒ヶ岳という名前に何か特別の意味があるのかと思ったり、その中で一番の本元は伊那の駒ヶ岳ではないかなどとこだわるようになり、駒ヶ岳の頭に西とか、木曾とか、区別のためにいろいろ着けて呼ぶのも苦になったりするよ

うになった。

最初、駒ヶ岳という山名は馬と一緒に大陸から来たのかと思っただ、中国にはないということを知った。

たまたま昭和五十七年に中国への研究旅行に参加したので、それでも思い西安から敦煌までの陸路は案内人に頼んで馬に關係する山の名を尋ねた。でもやはり駒ヶ岳という山の名は発見できなかった。

ただ一つ、嘉峪関かよくかんでのことであつた。嘉峪関城は万里の長城の西端で、遠く南方には雪におおわれた祁連山脈しれんを望み、近く北西に横たわる黒色の山肌の山脈を馬しゅう山と呼んでいた。「しゅう」という字は、髟の下に宗を書き、馬のたてがみのこと。山容や山肌の様子がよく似ているところから名付けられたもので、詳しいことは何も分からなかつたが、この地と馬のかかわりを思わされた。

管見では、駒ヶ岳という山の名は、やはり中国から来たものではなく日本独自のものとなつた。

そんなこともあり、今までいろいろなかかわつた駒ヶ岳のことについて書いてみたいと手を着けたのがこの小冊子で、まとまつた内容ではないので題名は「駒ヶ岳ものがたり」とした。しかしこの駒ヶ岳も伊那側のこと为主になるので、「ふるさと山」を頭に付けた。しかし、こ

のふるさとも今日では人それぞれに異なることが多くなっている。ここでは天竜川上流地域の駒ヶ岳に就いて書いてみたことになる。

本稿執筆に当たっては、上伊那郡教育会発行の『駒ヶ岳研究』（第一輯 昭和十五年・第二輯 昭和十八年）に終始お世話になった。

もう六十年も前の戦時中発行の小冊子二冊ではあるが、多年の実地踏査と学界の研究とを重ね、広く古来の文献を渉猟してまとめ上げた駒ヶ岳の重要資料集で、先輩各位の学究に対しては敬服するのみである。

小著『駒ヶ岳ものがたり』は、ふるさとの山、歴史の山を語るには余りにもささやかで内心忸怩たるものがあるが、せめて馬の年の記念ともならば、少しは救われるかと思ふ次第である。

（平成十四年三月）

#### 【参考文献】

- 『吾妻鏡』『信濃史料』第三卷（同刊行会 昭和二十八年）
- 『飯島町誌』中巻（同刊行会 平成八年）
- 『伊那温知集』新編伊那史料叢書（二）（伊那史料刊行会 昭和五十年）
- 『阪本天山駒ヶ岳登山記通釈』小松 徹（『伊那路』第十卷第三号 昭和四十七年）
- 『伊那志略』路原拾葉第二十一輯（上伊那郡教育会 昭和十六年）
- 『伊那市の小字名』（伊那市教育委員会 平成三年）
- 『委寧能中路（伊那の中路）』『すわの海』新編信濃史料叢書第十卷（信濃史料刊行会 昭和四十九年）
- 『歌集伊那』古歌篇（池田寿一・今村良夫・村沢武夫編 昭和三十六年）
- 『上伊那誌』歴史篇（同刊行会 昭和四十年）
- 『木曾駒ヶ岳』二万五千分の一地形図（国土地理院 昭和五十二年）
- 『岐蘇古今沿革志』武居正次郎編著（国書図書刊行会）

大正三年)

『吉蘇志略』 栗岩英治譯文(昭和九年)

『木の下蔭』 落原拾葉第九輯(上伊那郡教育会 昭和十二年)

『工藤文書』 『信濃史料』 第四卷(同刊行会 昭和二十九年)

『駒ヶ嶽研究』 第一輯(上伊那郡教育会 昭和十五年)

『駒ヶ嶽研究』 第二輯(上伊那郡教育会 昭和十八年)

『コマクサの古典を追って』 茅野益穂(『伊那路』 第三十九卷第四・六号 平成七年)

『阪本英臣の駒ヶ岳見聞復命書』 北原通男(『伊那路』 第十二卷第十二号 昭和五十三年)

『信濃奇勝録』 新編信濃史料叢書第十三卷(信濃史料刊行会 昭和五十一年)

『信濃地名考』 新編信濃史料叢書第一卷(信濃史料刊行会 昭和四十五年)

『信濃毎日新聞』(平成十三年七月十七日)

『信州伊奈郡郷村鑑』 新編信濃史料叢書第四卷(信濃史料刊行会 昭和四十六年)

『新著聞集』 日本隨筆大成第二期5(吉川弘文館 昭和四十九年)

『諏訪大明神畫詞』(今井広龜著 昭和五十四年)

『高遠記集成』 落原拾葉第十一輯(上伊那郡教育会 昭和十二年)

『長野県史』 通史編 第四卷近世編(同刊行会 昭和六十二年)

『長野県史』 近世資料編 第六卷中信地方(同刊行会 昭和五十四年)

『長野県史』 近世資料編 第四卷(一) 南信地方(同刊行会 昭和五十二年)

『長野日報』(平成十三年七月十七日)

『早太郎』 『日本伝奇伝説大事典』(角川書店 昭和六十二年)

『落原拾葉』 第八輯(上伊那郡教育会 昭和十二年)

『落原拾葉』 正巻四十四・四十五(高遠町図書館所蔵)

『箕輪町誌』 歴史編(同刊行会 昭和六十一年)

『箕輪町の石造文化財』(箕輪町歴史研究会 平成十二年)

『宮田村誌』 上巻(同刊行会 昭和五十七年)

## 駒ヶ岳年表

- |      |             |  |
|------|-------------|--|
| 738  | 天平10 . 1    | 信濃国、黒身白鬣尾の神馬を献ずる（続日本紀）                                 |
| 801  | 延暦20        | 坂上田村麿、蝦夷征伐の途次伊那郡と諏訪郡の境大田切を通過する（諏訪大明神畫詞）                |
| 816  | 弘仁7         | 慈覚大師、藤宝寺（仲仙寺）を開創する（寺伝）                                 |
| 860  | 貞観2         | 本聖上人、光前寺を開創する（寺伝）                                      |
| 1180 | 治承4 9 . 10  | 甲斐の武田信義・一条忠頼等、伊那郡大田切郷之城に平家の方人菅冠者を滅ぼす（吾妻鏡）              |
| 1336 | 建長3         | 小井亘能綱の所領譲状の四至境に「こまかたけ」の山名が二か所に見える（小出文書）                |
| 1591 | 天正19<br>慶長6 | 天正検地帳に内ノ萱がみえる<br>牛首峠に初期中山道が開通する                        |
| 1625 | 寛永7         | 木食但唱上人、大田切川上流に草庵を結び石の地蔵を刻む地蔵平や帰命山の名おこる                 |
| 1648 | 正保4         | 幕命により「信濃国絵図」ができ、また飯田藩主脇坂安元が「信州伊奈郡之絵図」を作り、ともに駒ヶ岳が記載される  |
| 1664 | 寛文4         | 尾張藩の佐藤半太夫等、山村甚兵衛の案内で駒ヶ岳の見分を行う（この時山中で大きな馬を見たという噂話が生まれる） |
| 1675 | 延宝2         | 内ノ萱一帯が高遠藩家中新田として開発される                                  |
| 1690 | 元禄3         | 松代藩主真田氏、幕命によって高遠領内の総検地を行うも御立山、村山、百姓山共に「高山険阻故御検地に及ばず」   |
| 1696 | 9 . 6       | 木曾側の働きかけにより権兵衛街道が開削される                                 |
| 1710 | 宝永7 . 閏8    | 小出村の百姓等20人、権現山を経て濃ヶ池に雨乞いの一泊登山をする（駒ヶ岳一覽記）               |
| 1711 | 正徳元         | この頃、宮田村の杣人等、黒川入より本岳近くまで登る（駒ヶ岳一覽記）                      |
| 1719 | 享保4         | 木曾奈良井より北川藤太夫等、駒ヶ岳の絵図作成のため登山する                          |

- 1720 享保 5 . 9 幕命により薬草採集のため丹羽正伯が木曾巡村、随行の野呂源次等が駒ヶ岳方面にて採取する（山村氏留書抜粋）
- 1723 8 . 10 星野縫殿介、高遠領分郷村絵図を仕立る
- 1727 12 . 宮田側三か村と上穂側二か村との大田切入紛争につき幕府が双方入会と裁許する（横山文書）
- 1735 20 筑摩郡木曾村々産物書上、高遠領産物書上帳が出来る
- 1736 元文元 8 . 10 高遠藩郡代安藤太郎兵衛、小出村百姓等を率いて（113人）三泊の見分の登山をなし、一覽記を作る（駒ヶ嶽一覽記）
- 1740 5 関盛胤、『伊那温知集』を著す
- 1741 6 宮崎言周、『伊奈郷村鑑』を著す
- 1741 寛保元 藤沢川から大田切川迄の山麓の猪垣の再普請が行われる  
青木昆陽、古書改めのため伊那に来る（上伊那誌歴史篇）
- 1749 寛延 2 神谷養勇軒、紀州藩主の命により『新著聞集』を著し「信州駒が岳馬化して雲に入る」の話を載せる
- 1755 宝暦 5 三村道益、『木曾薬譜』を著し、これより木曾の薬草薬種の名声世に高まる（第一次信濃 第3巻6号）
- 1756 6 . 8 . 6 高遠郡代阪本英臣、駒ヶ岳見分のため宮田・小出村の人足等（70人）を率いて宮田より登山して小出へ下山し、復命書を作る（駒ヶ岳見分復命書）  
三村道益、藩主の命にて松平君山を迎えて木曾を案内する  
この年代に大平峠開通する
- 1757 7 松平君山、尾張藩主の命により『吉蘇志略』を著す
- 1767 明和 4 吉沢好謙、『信濃地名考』を著す
- 1779 安永 8 葛上紀流、『木の下蔭』を著す
- 1784 天明 4 . 7 23 高遠藩郡代阪本天山、宮田・小出村から村役人・人足・石工等（76人余）を率いて山見分をなし、勒銘石を刻み、「登駒嶽記」を著す（登駒嶽記）
- 1792 寛政 4 『翁草』に駒ヶ岳に関する記事あり
- 1794 6 光前寺の『仏薬証明犬不動靈験物語』ができる
- 1796 8 宮田村の小町谷文五郎と唐木五郎右衛門が宝剣岳に不動尊像を祀る

- 1799 寛政11 .6 .11 高遠藩郡代岡村十郎兵衛、総勢22人、地元人足50余人を引き連れ横川山を見分し、経ヶ岳に登る（横川山巡覧記）
- 1800 12 星野葛山、『高遠記集成』を著す
- 1804 文化元 6 .1 岡谷村の寂本行者、伊那木曾両側より駒ヶ岳登山道を開く、伊那側は内ノ萱、野田場、胸突、行者岩、峰伝い頂上へ
- 1811 8 寂本行者、宝剣岳の駒ヶ岳大権現に鉄の錫杖を奉納する
- 1814 12 中村元恒、『伊那志略』を著す  
寂本の弟子先明行者、伊那村に住み、講仲間を率いて小屋敷から権現山、将棊頭山を経て頂上へ登山する
- 1818 文政元 6 江戸梅龍院法印講中、前年に引き続き登山し、濃ヶ池一帯の登山道に銅仏十三体を奉納し、山上にて護摩供養をなす
- 1819 2 .7 梅龍院法師講中、濃ヶ池・弁財天両社を建立する
- 1828 11 .7 江戸善正院法印等、先年に続き再度登山して護摩供養をなす
- 1829 12 堀内元鑑、『信濃奇談』を著す
- 1832 天保 3 木曾須原宿より上穂村へ駒ヶ岳新道開削の計画を持ち込むも実現の運びとならず  
8 .5 宮田宿、駒ヶ岳登下山口としてにぎわい、『駒ヶ岳御尋書』ができる
- 1834 5 井出道貞、『信濃奇勝録』を著す
- 1837 8 御子柴村の百姓等、濃ヶ池にて雨乞いをする  
9 伴人東朝軒亀伯、『駒ヶ岳詣』を著す
- 1842 13 .8 .3 中村元起、藩士3人と共に権現山を経て駒ヶ岳に登頂し、宮田村に下る（駒嶽紀游）
- 1843 14 .7 .19 田中甚庵、権現つるねを経て登山し『登山記』を著す  
嘉永伊那の米講、結社され登山道の整備に努める
- 安政 9 .4 木曾の武居用拙、駒ヶ岳に登る（登山記）
- 1871 明治 4 大田切入が官有林となる
- 1875 8 .7 .25 官命により諸山に採薬中の田中芳男、飯島より山中二泊空木岳に登る（信州諸山採薬記）（信濃 第53巻第2号）
- 1876 9 上殿島的那須環、門弟と共に駒ヶ岳一泊登山をなす
- 1880 13 .7 .15 西伊那部学校生徒67名、内ノ萱より本岳に登り濃ヶ池に一

- 泊して下山（月桂新誌）
- 1881 明治14 英人ゴーランド、日本中部の三山並みをヨーロッパのアルプスに因んで日本アルプスと総称する  
その後、小島烏水が三山並みを北アルプス・中央アルプス・南アルプスの三つに分称する
- 1886 19 伊那諏訪の米講信者、内ノ萱に駒ヶ岳神社里宮を建立する
- 1889 22 原田豊吉、駒ヶ岳を主峰とする山脈を木曾山脈と命名する
- 1891 24 . 8 . 12 英人ウエストン、木曾上松より駒ヶ岳に登り、12時間で伊那部に到着する 後『日本アルプスの登山と探検』を著し駒ヶ岳を世界に紹介する
- 10 28 濃尾大地震あり、駒ヶ岳に崖崩れあり
- 1892 25 . 3 宮田村と諏訪形区講社所有の山頂の駒ヶ岳神社へ寂本先明教会が加盟し講社の活動を共にする
- 1894 27 陸地測量部、駒ヶ岳に三角測量の撰点を設置する
- 1899 32 この頃上伊那郡下の高等小学校の駒ヶ岳集団登山が始まる
- 1909 42 河野齡蔵・矢沢米三郎、植物採集のため宝剣岳より空木岳へ縦走する
- 1911 44 陸地測量部、五万分の一地形図「赤穂」「伊那」を出版する
- 1912 45 内ノ萱において駒ヶ岳開山百年祭が行われる
- 1913 大正2 . 8 . 26 中箕輪尋常高等小学校高等科生徒等、駒ヶ岳登山にて遭難し校長外生徒等11名遭難死する
- 1914 3 . 8 . 15 上伊那郡教育会、駒ヶ岳に遭難記念碑を建立する  
岡谷における全国民謡大会で「おんたけやま」出演（羽広）  
伊那電気鉄道、辰野から宮田を経て赤穂迄開通する  
武居用拙の『岐蘇古今沿革誌』出版される
- 1921 10 上伊那郡教育会自然研究調査班5名、内の萱より宝剣岳、極楽平、空木岳、南駒ヶ岳、オンボロ沢を経て七久保に下山し、完全縦走をする
- 1922 11 伊那電気鉄道株式会社、太田切発電所を建設する  
13 . 7 . 27 ~ 8 . 3 まで 上伊那郡教育会自然研究調査班一行21名、中央アルプス縦走植物調査をなす

- |      |          |   |
|------|----------|---|
| 1931 | 昭和6 8 30 | 勅銘石保存建碑会、勅銘石保存記念碑を建設する  |
| 1933 | 8        | 伊那市余地に伊那節の碑建立   |
| 1935 | 10       | 東京帝大スキー山岳部員、宝剣岳、空木岳、南駒ヶ岳の冬期縦走に成功する  |
| 1940 | 15       | 上伊那郡教育会、『駒ヶ岳研究』を編集発行する  |
| 1951 | 26       | 上伊那教育会、『西駒ヶ岳登山案内』を発刊する  |
|      | 11 22    | 長野県、中央アルプス一帯の自然を保護するために県立公園第一号に指定する   |
| 1958 | 33       | 中部電力株式会社、新太田切発電所を建設する   |
| 1960 | 35       | 伊那公園に伊那節発祥之地の碑を建立する   |
| 1962 | 37 .12   | 明治末期に大芦に建てられた駒ヶ岳神社里宮一の鳥居が内の萱に移される   |
| 1967 | 42       | 中御所しらび平より千畳敷カールへロープウェイが開設され駒ヶ根高原の観光開発が進む  |
| 1971 | 46       | 伊那市余地に民謡碑（伊那節の碑）建立（伊那節保存会）  |
| 1975 | 50 .7    | 伊那中学校駒ヶ岳登山隊、落雷に遭う   |
| 1976 | 51       | 新田次郎、『聖職の碑』を著し、次いで松竹映画「聖職の碑」ができる  |
| 1978 | 53       | 駒ヶ根営林署等、駒ヶ岳にコマクサ再生のため種蒔きをする（『信毎』）   |
| 1977 | 55       | 伊那毎日新聞社、『伊那節のうた』を発行する   |
| 1979 | 57       | 中央アルプス太田切川流域の自然と文化総合学術報告書発刊   |
| 1990 | 平成2      | 集団登山の地元中学生、西駒山荘脇にコマクサの苗2000本を植える（『信毎』）  |
| 1995 | 7        | 集団登山の地元中学生、西駒山荘脇にコマクサの苗を植える以後、伊那地区高山植物保護対策協議会による再生・増殖活動は、自然増殖に任せ経過を見守る（『信毎』）<br>茅野益穂、「コマクサの古典を追って」を発表する（『伊那路』第459・461号） |
| 2001 | 13       | コマクサの群落、西駒山荘付近に花咲き誇る（『信毎』）  |

赤羽 篤（あかはね あつし）

大正9年 上伊那郡川島村（現辰野町）に生まれる。

長野県師範学校を卒業し、県下小中学校に勤務し、かたわら

県・郡・市・町・村誌史等の編纂に関与した。

## ふるさとの山 駒ヶ岳ものがたり

---

平成14年3月28日 発行

企 画	国土交通省中部地方整備局	長野県駒ヶ根市上穂南7 - 10
発 行	天竜川上流工事事務所	〒399-4114 ☎ 0265-81-6415
著 者	赤 羽 篤	長野県上伊那郡辰野町渡戸 〒399-0512 ☎ 0266-47-5133
編 集	(株)環境アセスメントセンター松本研究室	長野県松本市島立439 - 2 〒390-0852 ☎ 0263-47-6644
印 刷	双 葉 印 刷 (有)	長野県松本市城東2 - 2 - 6 〒390-0807 ☎ 0263-32-2263

---

## 「語りつぐ天竜川」の発刊にあたって

南アルプス、中央アルプスの高峰にはさまれて、伊那谷を北から南へ貫流する天竜川。その流域では、あり余るほどの自然の恩恵に浴して、人々は豊かな暮らしを育んでいます。しかし、名にし負う“暴れ天竜”は、ひとたび豪雨が見舞えば、日々の穏やかな表情を一変し、猛々しい牙を剥き、人々の暮らしを脅かしてきました。

天竜川上流工事事務所では、天竜川が“母なる川”として優しい微笑をたたえ続けて欲しいと願う人々の切なる気持ちに応えるため、半世紀にわたり、地域の人々の多大なご協力のもと、自然の脅威と闘いながら河川改修事業や砂防事業に取り組んできました。しかし、まだまだ危険な箇所は多く残されており、絶えず流域の変貌をみつめ、河川管理施設、砂防施設の整備と維持を図っていかねばなりません。

平成9年には河川法の改正が行われ、これまでの「治水」・「利水」を主な目的として進められてきた河川の整備及び管理は、新たに「河川環境の整備と保全」を目的に加えるよう位置づけられました。また、地域の意見を反映した河川整備の計画策定の手続きも創設され、地域の方々の意見を反映させた河川整備の推進が求められる時代になってきています。この地域の方々の意見を採り入れる際には、この天竜川流域に暮らす人々が長い歴史の中で育んできた風土や自然環境といった、基本的な事項について我々行政も理解を深めることが重要と考えています。

「語りつぐ天竜川」は、こうした考え方に立ち、天竜川に関する地域の知見や経験を収集し、広く地域共有の知識とすることにより、地域の方々に天竜川に対する認識を深めていただき、よりよい天竜川を築いていくことに役立てたいと思い発刊するものです。昭和61年度に初版を発刊してから早16年を迎え、今回の発刊を合わせて55巻になります。これも偏に天竜川を愛する地域の方々、その気持ちに答えようとお忙しい中ご協力いただいた執筆者の方々の賜物です。

なおご執筆頂いた方々には、自由な立場からお考えを披瀝して頂いていますので、国土交通省の見解とは異なる場合がありますことを付言します。

国土交通省中部地方整備局天竜川上流工事事務所

所長 浦 真

## 「語りつく天竜川」目録

- |                         |        |
|-------------------------|--------|
| 1. 伊那谷の気象               | 米山啓一著  |
| 2. 天竜川上流域の立地と災害         | 北澤秋司著  |
| 3. 天竜川に於ける河川計画の歩み       | 鈴木徳行著  |
| 4. 総合治水の思想              | 上條宏之著  |
| 5. 総合治水と森林と             | 中野秀章著  |
| 6. 伊久間地先に於ける天竜川の変遷      | 松澤武著   |
| 7. 天竜峡で見た天竜川水位の変遷       | 今村真直著  |
| 8. 村境は不思議だ              | 平沢清人著  |
| 9. 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷     | 倉沢秀夫著  |
| 10. 諏訪湖の御神渡り            | 米山啓一著  |
| 11. 理兵衛堤防               | 下平元護著  |
| 12. 近世 天竜川の治水 伊那郡松島村    | 市川脩三著  |
| 13. 川筋の変遷 天竜川と三峰川の場合    | 唐沢和雄著  |
| 14. 伊那谷山岳部の降雨特性         | 宮崎敏孝著  |
| 15. 天竜川の橋               | 日下部新一著 |
| 16. 伊東伝兵衛と伝兵衛五井         | 北原優美編  |
| 17. 天竜川の魚や虫たち           | 橋爪寿門著  |
| 18. 天竜川のホタル             | 勝野重美著  |
| 19. 天竜川流域の村々            | 松澤武著   |
| 20. 小渋川水系に生きる 人と水と土と木と  | 中村寿人著  |
| 21. ものがたり 理兵衛堤防         | 森岡忠一著  |
| 22. 量地指南に見る 江戸時代中期の測量術  | 吉澤孝和著  |
| 23. 土木技術と生物工学 生きものを扱う技術 | 亀山章著   |
| 24. 戦国時代の天竜川            | 笹本正治著  |
| 25. 天竜川の水運              | 日下部新一著 |
| 26. 惣兵衛川除               | 市村咸人著  |
| 27. 紙芝居 開墾堤防 下伊那郡豊丘村伴野  | 竹村浪の人著 |
| 28. 昭和36年伊那谷大水害の気象      | 奥田穰著   |
| 29. 天竜川の淵伝説 『熊谷家伝記』を中心に | 笹本正治著  |
| 30. 天竜川の源流地帯            | 赤羽篤著   |

- |   |                       |
|---|-----------------------|
| 31 . 東 天 竜                                | 三浦孝美 共著<br>仁科英明       |
| 32 . 天竜河原の開発と石川除                          | 塩 沢 仁 治 著             |
| 33 . 伊那谷は生きている                            | 松 島 信 幸 著             |
| 34 . 天竜川の災害伝説                             | 笹 本 正 治 著             |
| 35 . 天竜川の災害年表                             | 笹 本 正 治 編             |
| 36 . 天竜川水運と樽木                             | 村 瀬 典 章 著             |
| 37 . 水辺の環境を守る                             | 桜 井 善 雄 著             |
| 38 . 諏訪湖 氾濫の社会史                           | 北 原 優 美 著             |
| 39 . 河川工作物と魚類の生活                          | 中 村 一 雄 著             |
| 40 . 天竜川上流域の過疎問題                          | 山 口 通 之 著             |
| 41 . 資料が語る 天竜川大久保番所                       | 松 村 義 也 著             |
| 42 . 天竜川上流 河辺の植物と植生                       | 関 岡 裕 明 著             |
| 43 . 水利開発にみる中世諏訪の信仰と治水                    | 藤 森 明 著               |
| 44 . 横川山巡覧記 『辰野町資料第87号』より                 | 辰野町教育委員会編<br>赤羽 篤校訂   |
| 45 . 天龍川の鳥たち                              | 福与佐智子著                |
| 46 . 遠山川流域の民俗とふるさとイメージの創造                 | 浮 葉 正 親 著             |
| 47 . 田切ものがたり                              | 赤 羽 篤 著               |
| 48 . カエルと暮して                              | 山 内 祥 子 著             |
| 49 . 伊那の冬の風物詩 ざざ虫                         | 牧 田 豊 著               |
| 50 . みんなの三峰川を次世代に                         | 三峰川みらい会議<br>事 務 局 編   |
| 51 . 三峰川ものがたり                             | 三峰川みらい会議<br>北 原 優 美 著 |
| 52 . 天竜川水系の水質<br>「泳げる諏訪湖・水遊びのできる天竜川」を目指して | 沖 野 外 輝 夫 著           |
| 53 . 天竜川の帰化植物たち                           | 木 下 進 著<br>(以上既刊)     |
| 54 . 中央構造線読み方案内 諏訪から大鹿村地蔵峠まで              | 河 本 和 朗 著             |
| 55 . ふるさとの山 駒ヶ岳ものがたり                      | 赤 羽 篤 著<br>(発刊中)      |